

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年十月二十五日 印刷
昭和五十年十一月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五八二号



日川協加盟

No. 582

特集・はたらくうた

十一月号

垂井葵水遺句集刊行記念句会

★誰からも愛された垂井葵水さんの遺句集が出ました。(非売品ですがご希望者には送料共千円)

日時 11月7日午後6時
会場 大阪府中小企業文化会館

(二階二号室)

天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町九丁目下車南三百米
電話 七七一四〇九六

柳話 川村 好郎

兼題

「みかん」 大矢 十郎 選

「新聞」 野村 太茂津 選

「スポーツ」 西田 柳安子 選

「粹人」 西 尾 榮 選

席題 (二題・題と選者は当日発表)

会費 三百円

投句 郵券百円封入

12月8日の兼題

串 「肝っ玉」 「織る」 「傾く」

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 焼餃子 又焼饅
焼 売 餃子 饅

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL 641 0551-2



＜出張店＞ なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

駒形どじょう屋

日川協常任理事会の月例会が東京が当番で9月13日蔵前の竜宝寺川柳会館で催され、先ず川柳翁の墓前で186回川柳忌の読経、日川協設立の報告、記念撮影等の後、東京柳界代表との懇談が持たれた。その席で新しく加盟された社も7社に達し、極めて有意義な会となったが、夕方から打ち揃うて駒形どじょう屋に席を移し懇親の宴となった。何分にも私は初めての事であの姿のままの鍋料理にはいささか辟易のいでであった。目をつぶって食べなされと教えられ、その通りにやると、これ

は又如何なこと、忽ち何とも言えぬ佳味に魅せられて、いくらでも食べられそう。次々出てくる変った料理も一つ一つ独特の風味、最後に味噌汁でご飯を頂く頃には、一かどのどじょう通になり、帰途には辻々の目印を又来る時の道標に覚えこむ熱心なファンとなる。初対面の東京の方々とも10年の知己同然。折りからの暑さも忘れて款をつくし、茶六氏のお声で日川協の弥栄の手じめ迄しめられて散会した。

微くさいセーターに秋の肌ざわり

みんな若いうたごえになる秋の雲

山のこだまねっからの音痴です

ファツションがショウウインドで高笑い

ひとりばち酒までやめてみるとする

中島生々庵

川柳塔十一月号

座右の句

直角に質屋の中へ折れ込んだ

(豆 秋)

私の句

靴はいているのに話むし返し

宮 川 珠 笑

川柳塔十一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

駒形どうよう屋

中島生々庵 (1)

剣師の魂魄

工藤甲吉 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(8)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

西尾 葉選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (30)

麻生路郎物語

(11)

東野 大八 (23)

秀句鑑賞

(同人吟)

尼 緑之助 (28)

(水煙抄)

水粉千翁 (29)

近作

諸家 (22)

百人一首と川柳 (17)

富士野鞍馬 (38)

愛染帖

橘高薫風選 (40)

批判精神

戸田古方 (48)

剣師の魂魄

工 藤 甲 吉

北国の秋晴の一日、津軽文化の発祥地で津軽の古都といわれる「弘前」で、弘前城の菊ともみじ祭りを楽しんだあと、古い柳友の一戸花天君を訪ねたら「この本見だごとおるべが」(見たことあるか)と見せてくれたのが井上剣花坊撰「新川柳六千句」。

大正六年十月一日、東京は牛込区神楽坂上の株式会社南北社の発行。定価八拾五銭とあり、タテ十センチ、ヨコ二十四センチ、二百七十三ページで、私にはもちろん初めて。

この本に出ている内藤鳴雪撰「秀句六千句」の広告に「本書は現代俳句界凡ゆる方面に渡り内藤鳴雪宗匠の撰聞を軽秀句六千を得て納めたり作句家の羅針盤たるは素より、愛句家の好伴侶たり」とあるのを見ると、これと同じ趣旨、目的をもって刊行されたものとみてよく、剣師が新川柳を興した明治三十六年七月から大正六年七月までの十五年間、全国川柳作家数千人のおおよそ八十何万句から秀逸六千句を抜いたもの、というからいわば「新・柳多留」の初篇といっていいいようなものかもしれない。

はたらくうた……(同人特集)

若林草右・中村ゆきを・小林孤呂二・竹内翁童
大路美幸・塩満 敏・玉置重人・垂井千寿子

直原七面山……(37)

前書きの句はやめよう
出合いさまざま……

藤村青一……(49)

一分間の柳論……

遠山可住……(53)

50年度二賞発表句会……

新之助・岳人……(46)

句……

小松園・弦太朗……(39)

雅号ぶっちゃけばなし
塩満敏さんの幸運……

西 いわを……(47)

初歩教室……

見島与呂志……(49)

大萬川柳「ほとぼり」……

本田恵二朗……(52)

柳界展望……

川村好郎選……(54)

各地柳壇(佳句地10選)……

(庸佑・整理)河原みのる……(56)

「紅葉」
一路集「夜和」……

藤岡花梢選……(50)

「平和」……

柳楽鶴丸選……(51)

編集後記……

吉田圭堂選……(55)

(一三夫・葉子)……(67)

座右の句

いのち継ぎ足され足されて古稀の春

(好郎)

私の句

人間の限度で神の重さ知る

松下梁水

ところで、この本の巻頭に、私などには、まさに頂門の一針ともいふべき次の一文がある。すなわち(原文のまま)

面前の譽有るは易く、背後の毀無きは難し、古川柳興って一百年、当時の狂態、或は一脈の文運を持し、新川柳創まって十五年、現代の詩人、動もすれば遊戯の末に墮せんとなす、選評の蔽王者の天下を治むるに似、編纂の重き、覇者の諸侯を合すが如し、予其器に非ず、敢て之に従ふ、固より最善を望む可からず、新川柳六千句、無名作家の努力に鑑み、明治末大正頭、句風変化の大勢を察し、聊か得んとする志有る者は、来て此巻を開くに吝なる勿れ。

大正六年八月

柳樽寺剣花坊

私はこの一文を読み、先覚、剣花坊のその魂と、その激しい気力、そしてまたその鋭い精神力とに強い感動を覚えたので、おせっかいとは思いつながら皆さんにもなにごしのかの「糧」にとあえて紹介させていただいた。ちなみにこの六千句中「大正四年上半の句」の中に

新世帯春をゆっくりさし向ひ 路郎

(右路郎氏は前年よしの女史と婚せり)

とあり、また「大正元年八月改元の日以後の句」の中には
燐曳に儼かに笑みし星明り よしのをみつめました。



西尾 栞選

ふり向かぬ後姿に託す夢

竹原市 山内静水

これだけは言わせてほしい地声です

熱っぽい視線に積木くずれそう

アトラクションへ敗けてはいない郷土芸

良縁に違ひはないが娘をとられ

老妻とおててつなぐも旅なれや

倉敷市 野田素身郎

次の次あたりを控え目に狙い

噂してたとこへ噂の通夜の客

親戚の法事に連休日がつぶれ

秋には秋の味覚が妻の里から来

季節はずれの蚊が宿題の邪魔をする

ユニホームがすてき和服もまた素敵

八尾市 宮西弥生

割り切った心に住んでいた未練

つまずいた女に長い影法師

トゲのない顔からトゲのある言葉

ほとばりに酔う間は鼓動を止める

生きる坂道真向から攻めてくる

追いつ追われつつして胸に燃ゆるもの

倉敷市 水粉千翁

義理固いお人が悪いとも云われ

企みの色かレモンの値があがる

われ悔いぬべし仏像の貌まろく

片えくぼのぞく糸切歯に斬られ

忙中の閑へとび込む虫の声

すい上げて覗く寝顔は母のもの

香川県 三井酔夢

一分の點とうですむ記念日か

戦犯の三十年を追うカメラ

結婚をします費用はたのみます

今度こそ幸せバージン、ロードから

めちゃくちゃん落書き花嫁運転す

立ち直るべしと初秋の風に立つ

島根県 堀江正朗

節くれた指を神様ありがとう

二日酔いきまりの悪い妻の前

落ちつけば邪魔にされそうコップ酒

責任がないからこない話

誕生日今宵の虫は身に余り

見えぬ目に道ひとすじの光もつ

高槻市

若柳潮花

盆灯会浴衣へ宵の灯がはいり

落ち日へ丘のふたりはまだ立たず

忘れさせまいとするのか夢に立ち

待たされた団扇河原へ降りて行き

縫いあげて袖も通さぬものを溜め

台風一過絵になる月がうらめしく

島根県

堀江芳子

お互いに長生きしましうねと女医さん

市場かご誰のことやら声高に

その話委すよと晩酌寝てしまひ

くす玉を胸で割る日の夢捨てず

出勤のネクタイ歌で結んでる

這い上がる意地を教えたかたつむり

島根県

錦織文子

三猿を自爆と知ったかたつむり

夢かけて蜘蛛はロマンの四季を織る

点景の舟は暮しの棹をさす

私だけが知つてゐるくせのガスコンロ

点景へ女は過去を置いて視る
横ばいの蟹 人間を不思議がり

大阪府 不二田一三夫

どれもこれも俺に似た顔 五百羅漢

夕やけの美を憎らしと雲が出る

鼠の目きよろきよろ課長がはいって来た

ボルノでもよし 稼ぎに行け速達便

原稿紙が担架に乗る日こわしとぞ

長命番組消ゆ (30年6月13日～50年9月27日)

夫婦善哉が後家善哉で幕を閉じ

大阪府 本多柳志

そろばんの無い友情のさわやかさ

重荷とは気付かぬうちに背負わされ

禁欲は神に誓った訳でなし

野心家の素質は俺も持ち合わせ

会いに行く雨の予報は聞き流がし

ゲリラまで日本国費で育て上げ

八尾市 高杉鬼遊

地の底の母までとどく冬の雨

うとまれてまだ生きてゐる冬の蠅

国勢調査確に俺は生きてゐる

生れられ父はためらいがちに笑み

指名犯昆虫針に刺されたり

二割ほど値上りさんま海で聞く

青森市 工藤甲吉

善惡のどちらにも手はのびてゆく

一と筋の煙りも人間ひとの姿にて

無常迅速きようもまたいつか寝る

朴訥はその親切を喜ばれ

萩こぼるモノ思えとて萩こぼる

東京部 山根白星

今にして思うすんでのことばかり

送金に母礼状を嫁に宛て

人間に知恵の差はなきアーチェリー

ゆるしてもあげる解放してあげる

簾入れぬひとに浴衣の糊がきき

堺市 高橋千万里

チウインガム踏みつけふみつけ阿波おどり

バンガロー一線越えず朝となる

真実は知らねど噂さはおもしろい

餌だけを取られたような日がつづく

角かくし別の女となるちかい

大阪市 吉田圭井堂

通帳に穴があいたかいつもゼロ

ためらえば尚もつけ込む不仕合せ

実印が見当りませんと庇う妻

図面通り出来たがこの箱このいびつ

白も黒も黄色も騒ぐのがお好き

神戸市 小浜牧人

壁一重隣で爆弾などつくり

振り向けば登る闘志が鈍くなる

紙バッグ女は何を持ち歩く

栄転だ 左遷だ 一つ輪のなかの

敬老の日の年寄りが髪を染め

今治市 原田一風

引き合いに出されて古事記読み直し

万一の時の道連れ地下に充ち

すだれ越し和気霽々の家ばかり

父の居ぬ家庭長男無口にし

同情の線から足の出ぬ女

鳥取市 河村日満

夜半の業背中さすって腰揉んで

死にたいへ逆らいはせず指圧する

病妻の無口ころに渦が巻く

病妻のいつからか死を口にせず

亡き妻の句を詠む人の句がせまり

岸和田市 高橋操子

きき分けた孫へまぶたがあつくなる

ダイヤより健康と云う宝抱き

変る世のはげしさ焦点見失い

祭り太鼓不況忘れる音がする

不況下の寄付へ一そう背が丸し

大阪市 小出智子

住み馴れた町の夕陽に溶けてゆく

一枚の紙の重さを知る夫婦

異性感だんだん薄れてゆく怖さ
行かねばと思う一つに歯医者さん
父の部屋で壊れたままの置時計

松江市 柳 楽 鶴 丸

太陽と対話ひまわりの果報もの
プレセントのネクタイが首を締める
夫婦の笑い声五線譜からはみ出し
七転び八起お教え下さいダルマ様
ピンチ 安全牌がない

貝塚市 野 坂 つ き 子

平凡な女に戻って欠伸する
別離まだ云えないままに萩小径
五線譜に乗せると愛が生きてくる
ソロバンをはじくとみんなゼロになり
彩褪せた夫婦パントマイムがお好き

倉敷市 松 下 梁 水

言い訳は許さぬ父の襟正す
雲切れたとこで見つけた妥協点
子の決意試めす大きな石を積み
背を向けている本心は許してる
盆提灯亡母がもどったように揺れ

大阪市 河 野 君 子

九州の旅

トンネル列車いま妻母の縛を解く
雨の長崎詩の言葉を選ばない
(長崎)

水平線青い記憶を吸い尽くす
霧重く女の業を呼び醒す
旅の記録はそっと胸のカプセルに
(阿蘇)

和歌山市 吉 野 富 江

知事の名を覚えて帰る敬老日
短命の夫の我がまとも知らず
本当のフアンは妻が只一人
話さねば苛ち話せば腹が立ち
ライバルの家を避けてる回り道

米子市 林 瑞 枝

子を慕う波長先手の電話鳴る
ゴミ拾う手から立派な子が巣立つ
二度来ない人生の縮図を見る写真
子に聞かす足で学んだ人の恩
思案もう尽きて眠ろう明日の知恵

八尾市 香 川 酔 々

ジャン・ギャバン村長となる河内村
モンローが好きな男でお人好し
颯爽とアラン・ドロンは喪服着る
デイトリッヒの靴は砂漠に残ってる
テンプルの孫はやっぱりテンプルで

藤井寺市 西 い わ を

芋虫の頃もあったと蝶おもう
怠けものの台風もありホッとする
こおろぎの骸へ草を覆うてやる

見栄坊な父へ式場まかさねず

言う人が云えば言葉も生きて来る

大阪府 金井文秋

電気カンナ大工は楽になりにつけり

塗料の夢 白木の味が出したくて

友達に異性感じる日の無口

土地の神話 夢に終って倒産す

信号の傍 陸橋も暇なこと

兵庫県 遠山可住

還暦へまだまだ女の迷を秘め

駢足するつもり靴を購うたまま

ようやくにやる気が起きた灯を見上げ

法則など知らずみの虫ぶら下り

トラックが通り怪談ぶちこわし

大阪府 川口弘生

その時はハーフ 高い鼻の遺伝

河童の子 生れたくない世がつづく

ユーズトカー再婚話を聞く思い

台に乗るアシカは褒美を疑わず

日曜日善い顔の人に多く会う

藤井寺市 児島与呂志

愛がまた曲りくねっている呼吸

いちじくの色が気になる夜勤明け

切り兼ねる電話なやみがまだ続き

紅さしの指に紅ある女の手

素直さが欲しいと思う母の部屋

尼崎市 黒川柴香

老人としていたわられる席があき

また亡妻に逢える墓地の彼岸花

職辞めて妻の居らない広さ知る

もう孫も大人になって振りむかず

北限のソテツ荒浪を守られて

大阪府 西森花村

金庫には異状おまへん使い込み

献金を返せと被告となりたし

彼岸過ぎライバルが死に弟子が死に

敬老の日も割引きのない焼き場

日本のおなごはんらし鬼女の面

羽曳野市 塩満敏

自動化の街にウラシマ大郎めき

地下街の勤務鼻毛がのびてきた

夏休みすんでやれやれ親も子も

二学期の机ハチマキしめている

母の古稀

喜びの席は美事な輪をえがき

和歌山市 野村太茂津

訥弁の真実すなおな胸に滲み

雑談の死生に触れる目が光り

謎めいた過去は知性に触れず訊く

手も金も出さぬが一ト言有難し

雄兵の命まぎれもない重さ

西宮市 島居 百酒

雲行きを案じた傘をまた忘れ

桜井市 岩本 雀踊子

五十年住んでも故郷は別に持ち

離別の夢目覚めば妻の高軒

徐行したとて定年は延びもせず

ジョッキーが夏の終りの味となり

神戸市 中村 ゆきを

やすらぎを夢みて落ちた蟻地獄

報恩を忘れて漫画読んでます

じゃんけんぼん善意にみちた手をひろげ

肚わって話すこととはこの程度

サン格拉斯子供忘れるほど澄まし

西宮市 若林 草右

信用かズボラか定期見てくれず

六価クローム掘れとはいわぬ警察犬

新幹線江戸の川止めやって見せ

友逝く

黒枠に年の若さよ侘びしけれ

三七日の灯明は解脱の色となり

富田林市 岩田 美代

その中に音痴の音色の虫も居る

大見得を切るから尻尾見えて来る

花もたすそんな言葉が懐しい

ある誤算持たせた花の彩が褪せ

三分の電話でまとめた語が寒い

裏鬼門母の迷いに逆らわぬ

かごめかごめの鬼の子に父がない

一枚の舌の重さに座す男

男が背をむけるとさそいのすきがある

合鍵の妻の鍵に鈴がなる

倉敷市 奥谷 弘朗

下積を妻の笑顔でささえられ

椅子机 ちゃんと格差のある役所

国訛り話しかけたい気にさせる

約束のある口実で逃げて来る

横着な主人と鉢に見抜かれた

今治市 越智 一水

秋あわれ音を立てずにやって来る

旧道が好き曼珠沙華燃えている

誇らずに咲いてきれいな秋の花

必要なことだけ言うて無事な日々

無に返えるその日みどりの中にいる

岡山県 横山 一声

お帰るかと思えば煙草に火をつける

お寺はんもひと間を洋間に改造し

思ひ出の小径をブルが削り取り

薬に飲むつもりの酒の手があがり

自然を守れば出稼ぎせにやならず

愛媛県 渡辺 暁 童

達筆にすぎて返事を出ししぶり
太陽を食う人間と成り果てる
血のふれ合いを うすめるが金
ひかれるものに ぬげそうな下駄
めくら千人 酒でまんちゃく

守口市 野呂 右 近

ふり向けば花は無かつた過去の路
占いの灯に道探る蛾ともなり
働いた此の手を絹よ何故嫌う
幸とハッキリ言える物を持ち
一面が嘘を見て居た三面鏡

大阪市 江城 修 史

ふと洩らす一言嘘が生きて居り
受話器から流れる老いの愚痴も秋
背かれて過去ふり返る哀しさよ
振り向けば崩れる未練持ち帰る
隙見せぬ男の氣負いをあわれとも

大阪市 天 正 千 梢

無限の需要へ練達の手腕
偉くなりすぎるのも淋しいだろう
一片の雲流れに交わらず
うち鳴らす心の鉦を磨く日日
斧知らぬ密林の寂の柔かき

岡山県 出 原 敬 一

血が粘る思いに眠る二日酔
旧道へ入り爽やかな風に逢う
老斑の対話お達者でお達者で
故郷は善人ばかり住む所
野良犬が出迎えに來た無人駅

倉敷市 藤 井 春 日

盆栽に鉢を入れてる観世流
我儕がぶつかり合うてる倦怠期
よそよそしい都会の隅にある人情
出来すぎた女房で魅力感じない
有限の社長荷役もして御座る

竹原市 時 広 一 路

明日の日へ自作自演のドラマ書く
雑草の意地生きてやる生きてやる
鮮かに人目につかぬとこで咲き
氣に入らぬなり善人だと言われ
倅せを占うように茜雲

堺市 河 股 緑 水

蜜柑また豊作とある見舞状
目覚めれば今日になる日の恐い夜
咳してもどう言うこともない独り
テレビが故障差し込み外れてた
閉ざされた町工場の赤トンボ

西宮市 藤 村 メ 女

好きなひと重荷となつて來た噂

迷うてる心がうつる影法師
日本晴蒲団を叩く母の唄
異端者へミスターAが味方する
異端者が急に賛成する審議

広島市 林野甦光

爪に火を点し物価に追い越され
路地裏で生きてる音を叱るまい
子に孫に血を譲りゆく愚かとも
砂浜の点々愛を追いかける
頂上へやっとそれから転げ落ち

松江市 中川晃男

スタンドに飛び込むファウルとホームラン
青春の足跡甲子園の土を採る
ヨットの青春 海三角に切り取って
大ジョッキ女史の気炎を持て余し
お祖父ちゃんの灯籠ヨタヨタと流れ

和歌山市 垂井千寿子

過去帳に入れて亡夫の名の空虚
「空室あり」四代目のサインペン
遺伝だと片付けられるつむじの子
例えばの話は自慢の方へ向き
観光バス景色よいとこ恐いとこ

大阪市 山川阿茶

はげしさの裏のもろさへ思うこと
柘榴の実図案化すれば美を感じ

断酒会テレビじゃ酒のコマーシャル
冥途へも只では行けず貯金する
鏡見て笑顔に皺の出ぬ研究

岡山市 池田古心

俺の字は何故百面相になるのやら
わしづかみするのに自働ドア開き

岡山医大に入院

作句する意欲死掻きまわし
まだ指令来ないと死神うろちよろし
十日目に二キロ痩せ順怖し

竹原市 小島蘭幸

人恋しスーツキリリと着こなして
きっかけが掴めず今日も暮れるか
まっ暗にすると眠れぬ夜が続く
言い訳はせず速達で出しておく
秘密ひとつ隠せぬ男ではあり

和歌山市 小川佐知子

作業衣に生きる誇りのうたがあり
逢うことの喜び香袋秘す
方言が漁臭と共に乗ってくる
秋の風女ロマンに身をゆだね
踏む道の確かさ夫と共にあり

岡山市 白岩文衛

木曾路を行く(五句)

五平餅こころに背く世のならい

連子格子お六が髪を梳いている

山の宿山の音する土の鈴

旅人も句もほろ酔えり箸袋

中山道妻籠宿猫と寝る

岡山県 嘉数千代香

菊咲いて天の丸さの中に溶け

控え目な妻で黙ってレール敷く

仕方なく産んだ子供の世話になり

民宿へ泊り仏壇まで拝み

ネオン点滅ここにも川中島があり

松山市 谷のぶお

欲びも悲しみも酒のめぬ身の

ぶらんこにだあれもない虹を見る

男哀れ麗人高給大募集

花輪行く名前をかえて花輪行く

雷のおさまるまでを待つばかり

神戸市 仲 どんたく

やわやわと重もみがかかる婦人年

古き良き時代へ旅するクラス会

嫁がせて抜け殻のように向い合い

嫁だけが僕に相槌打ってくれ

植木屋の登れば伸びる老いの腰

竹原市 森井菁居

八人目の敵へうっかり気を許す

粗雑には触れず自主性買うてやろ

瞳に映るもの皆光る目の自信

これぞふるさと蛇に出くわし蝶が舞う

動かない証拠を敗者として握る

大阪市 西出一栄

夏宵の暮れがもどかし花火の子

暑に耐えて又ひと年を生きのびん

胃腸薬たよりに食べる葡萄好き

小遣いが溜り心ぶらした見たし

小一に園から案内同窓会

八尾市 大路美幸

損をせぬ割り引きだけが売れ残り

売り出しの汗は拳で拭き切れず

合掌の少年の指 天を指す

敬老が他人でなくなる日の孤独

一生の重みを載せて杖歩く

八尾市 高橋夕花

絵ごころの秋が自画像塗りかえる

一粒の葡萄に染まるころです

ウインドの女らしさの秋を選ぶ

冷えてゆく心のままに受話器置く

美しく生きんがための本を買う

鳥取県 林露杖

ストの日の線路とてつもなく長し

渡された合鍵真意を試される

背信の無言と知らぬ機嫌とり

まだ燃える火がある焰見せぬだけ
仮名文字のくねりどうにもままならず

大阪市 柳原静香

音のない世界(一句)

夢枕亡母の声のみよく聴こえ
海水着の跡くっきりと女風呂
十ずつを数え己れの罪の石
細胞検査判決を待つ囚人に似る
四面楚歌友情のかけら拾わねば

大阪市 藤田頂留子

雑巾がけたような今日の青い空
眼科医の息子眼鏡屋を開く

虫かごで草むら知らぬまますだき
現代のひき逃げ無礼打を笑えまい
徒歩競争スタート切らず踏み切り番

泉大津市 村上春巳

染めたるか朝の鏡に問うて見る

あまりにも四角に生きてうとまれる
ステテコになって肩の荷が降りる
ハイジャンプイルカ拍手を意識する
露路裏の夕顔靴の音をとめ

名古屋市 吉田水車

石曽根民郎氏句集「山彦」

柳魂のひびきしな乃の山幾重
チエツチエツと舌打をして雀逃げ

慎重審議値上げと決める
とつおいつするとも知らず自動ドア
目白なら轉りもせん朝の駅

富田林市 板尾岳人

嘘つかぬ雲の流れを読んだ峰
休火山河童も登りたがる峰
日が落ちて峰だんだんと目をつむり
夫婦流儀も銅婚迎えます
アイゼンをもう磨がいてる秋日和

大阪市 大坂形水

食中毒の犯人やっぱり折り弁当
馬肥える秋 夏瘦せを取り戻そう
川上と長島の違い聴くセミナー
コンサルタント今年の巨人例に引く
公園の横へ眠りにくるトラック

宝塚市 傍島静馬

臨終が迫りええこと喋りだす
老婆にまだ熾^{さか}ほどにある色香
昼寝おやつ風呂めし早寝老夫婦
縦のものの横にもせずにはやくのみ

豊中市 戸田古方

安藤寿美子氏の川柳塔賞受賞(一句)
ひ孫弟子とまではいかない古稀にして
嘘やないというのでいっそ嘘らしく
貸浴衣灯台見学断われ

いつもの灰皿やから落着かれ

岡山県 直原七面山

弱味を見せない寡婦の気構え

遊びつくした男の述懐

キヤッチボールの父子に断絶などは無し

出直しのきくお年ですよとおだてられ

松原市 玉置重人

レモンティ酸っぱくなったプロポーズ

ひとり住むマンション渴いた鍵の音

午後十時まだ帰らないクルマの子

台風の話は同じローンです

米子市 八木千代

はぐれ鳥むかしの雲の彩を抱く

庭草をむしり残して虫の夜

三才の疑問まっすぐ芯へ向く

子と話すこともないほど嫁に慣れ

東大阪市 竹中肖二

人道が小さくなってペタル踏み

夕映えの空へ浄土を画いてみる

怠屈した王様裸になりたがる

この町に住んで孤高の時の人

東大阪市 竹中綾女

嬉しい日折目正しい言葉聞く

朝目覚め手持ち無沙汰な旅の宿

すらすらと運ぶ話に裏があり

他人なら言える言葉が出ぬ身内

倉敷市 小幡里風

土壇場で男としての口を効き

肩書を抜けてのんびり湯に浸たり

捨て犬の根性長い橋渡る

真直ぐを歩くに冷たい風斜め

水見市 関美子

爪染めてなんのおふくろ望郷歌

唯一人石に泣くとも紅孔雀

口喧嘩愛の双曲線続く

夕化粧虚構の中の演技かも

富田林市 和田維久子

孫の口押えるママの手がはやい

流れ雲あなたであれば背負いたし

新米の艶米びつに明日みたす

小豆むしり今日もわびしい風の道

岡山県 竹内翁童

くされ縁とさとした夫婦の仲の良さ

野望みなついて実力やと知り

あじさいの摸索無色がほしいのか

秒針の唄リズムをくずさない

大阪市 黒田真砂

慰め合った失意の夜の流れ星

礫受ける女に欲しい別の顔

孤に耐えて寡婦美しい汗をふく

忘れ度い過去あり女の胸疼く

呉市 榎田英詩

仏壇の灯りを消して今日を閉じ
子守唄は序曲読経はフィナーレ
美術展わが作品に人おらず
喋ったら逃げそう幸を胸に溜め

大阪市 神谷凡九郎

害虫にさえも生命与えた神の意志
人間が死ぬ何かの始まりかのように
幕末の庶民を何故だか思もてみる
今日も無事でしたネと云うて寝ようかな

大阪市 飛田好一

躓けば男は酒によりかか
秒針が病の床を追っかける
点滴へ朝の陽ざしがまぶしすぎ
ゆれ動く心にはしい重い石

枚方市 宮川珠笑

他人ほめる人と酌む酒温かし
御苦労さんごろうさんと酷使され
線香の消えるを待たず去る墓前
昨日は母似今日は父似で祝われる

竹原市 三宅不朽

地図にない旅でひろった野火の詩
音を追い音に追われているタクト
一本の触角となる四面楚歌

咳すれば咳がみえそう秋の天

大阪市 河井庸佑

役付けられうるさい男放り出し
もったいをつけて地方へはじき出し
下馬評がひっくり返って左遷され
スパルタ教育やれば伸びると信じ込み

大阪市 宮尾あいき

打水を残して草にかけてやり
我が恋のみのらぬままに萩の花
阿蘇だより硫黄の匂う友の詩
つまみ食いみられた猫におすそわけ

松江市 恒松町紅

うれしい日もあり靴ヒモを固くしめ
真夜中のクシャミ地球はもう秋だ
集金人へそっと入れと子の昼寝
信仰とは別に伽藍を写される

島根県 榎原秀子

ひとりです算の音がきかす秋
萩の夜友の点茶の中に溶け
瘦せ細る三日月明日を信じてる
離島する心へ島は生きている

美祿市 安平次弘道

勝った記憶がギャンブルを止めさせず
嘘を信じられて心に借りがで
自衛論バラのトゲまで否定せず

裏の裏その裏かいたジャンケンポン

柏原市

大峠可動

朝顔の欠伸は絶命の合図

支え合う指は十本でも足りる

振りむいて許せるものの的になる

曼珠沙華平和と殺氣と哀しみと

兵庫県

大江秋月

やっと二個食べて梨狩りほり出され

注射針持つ看護婦の無表情

老眼鏡厄介なれど手放せず

土蔵の鍵明治の色で用を足し

島根県

小砂白汀

反骨の傾斜はひどくなるばかり

同じ道行くにも端とまん中と

人間がどう受けとめようと太陽氣にかけず

ピアノスト足で踏みつけ手で叩き

平田市

久家代仕男

ピエロよしそれが皆んなの為ならば

さっきまで不平の舌でおべんちゃら

刈草の堤へ残す月見草

老人の僻がくどい酒にする

京都市

都倉求芽

心配を楽しみにして子沢山

心の壁に穴を開ける鼠があなた

お隣りのピアノまだ先へ進まない

スジ通す誇り小国の平和論

堺市

伏見茂美

夫の素顔どこにユーモアあるのかな

おばあちゃんと云われ何やらくだけ腰

夏やせにしろく気苦勞絶えぬ主婦

秋祭り軒に提灯ない暗さ

大田市

藤田軒太楼

寝たきりのくせに老人我が折れず

明日あるを夢みて励む車椅子

口論へ気づいた嫁が孫よこす

ふんどしの紐が切れた老の氣負い

鳥取県

清水一保

忙しい時の一句で氣を沈め

老兵の如く生き抜く赤トンボ

公文書封書私文書の中で暮れ

一日を振りかえり想えば虫も啼き

倉敷市

能登原白水

嬉しさは初めて着たり娘のパジャマ

蓮の葉の穴は語らず花開く

煩惱を月の丸さに洗われる

澄みきって無心に廻る独楽となる

大洲市

堀内暁風

自家用車月賦もすまぬままに事故

嫁った娘の他人行儀でご挨拶

あきらめた頃見つかった落し物

足音へ声を落して目で合図

柳井市 弘津柳慶

花束へお義理に軽く握手する
五十過ぎて妻の着道楽ぶり返し
年金へそれから家計簿附け初め
転職をしても短所は抜けきれず

大阪市 中川滋雀

先見えてからの旅路に欲がふえ
香奠と書く薄墨にからむ義理
当てのないペンチにロダンが一人ふえ
領収書印紙のいらぬ日が続き

松江市 岡崎祥月

新風に意慾を趣味はちがうとも
下戸の俺いじめる宴会つづく日々
おしどりでないが金魚の糞となる
長短をかばい夫婦の道たのし

高槻市 福田丁路

鰍をかついでオイッチニの菊日和
緊張をほぐす真面目な顔の洒落
変人の三羽鳥に名を連ね
誓い新に三拝九拜

笠岡市 松本忠三

義父恭真僧正死去(三句)
戒名を授けて貰う番になり
案内も借りず極楽へ旅

極楽の旅へ法衣のふりむかず
耳よりな話に雑魚が寄ってくる

諫早市 原田明春

それぞれの愚痴と自慢の参観日
命あずけます舌がしびれるふぐ料理
小言よりましだ親父の小唄聞く
アパートのようにわが娘は部屋に鍵

米子市 増田竹馬

がまんにも限界がありゴム風船
芯のある飯も楽しいキャンプの夜
世話好きの娘が縁談に遠く居る
これからが人生 余生と云うなかれ

橿原市 岩井本蔭棒

仲の良い米ソヘスイッチ切って寝る
内ゲバに流す血汐の価値を問う
避難所から時々家を見に帰る
角の家車を怒る石を立て

和歌山市 若宮武雄

何もかも捧げ空箱のよな値打ち
生きている限り隠したいところがある
衆目を浴びて孤独でいる主役
転居先言わぬ空家がみたドラマ

和泉市 西岡洛醉

嘘つかぬ色で夕焼け明日を告げ
この村に床屋少さく生き続け

鼓動たしか初孫胸に抱きしめる
ふる里へ慕情連絡船の人となり

松江市 小林孤呂二

夕映がきれい観光客去らず

デカンショでも唄ってやろかこの空気

座を離れ酌げる強さをまだ残し

塀越えの花は奇麗とほめられる

宇都市 平田実男

スター誕生貞操かけたとは云わず

家計簿の赤字へ無駄が見い出せず

ソロバンで確めて見る計算器

家裁に勤めて離婚に踏み切れず

大阪市 津守柳信

自分だけ満足してた山歩るき

前置きの長い好意が無駄となり

早や起きにならされて来た帰省

供二人連れて米寿の旅行趣味

守口市 羽原静歩

脈はくのないコーヒーを飲んで

パーベキュー陽気な味がにじみ出る

割引きのチラシを見ても不感症

車窓からのマンション安う安う見え

和歌山市 津田与史

立秋の朝風鈴は音立てず

病人という肩書をまだ残し

赤トンボ軽し悩みを持たぬ翅
工場の紅葉一本だけの秋

東大阪市 斎藤三十四

優勝のマイク夢中でしたをくり返し

ネクタイを結んでくれた頃の妻

受けて立つ余裕の顔にある笑い

習いたての手相見へOLの真顔

倉敷市 稲田豊作

腰の低い方がピンはねされる側

世界一周啞の修業もして帰り

嬉々游泳荒浪知らぬ稚魚の群

再入院

あらあらあらと馴染みのナースたち

東大阪市 落合思月

爪染めて祖母の視野から遠くいる

病む妻を想えば旅もむなしかり

アイロンをきっちりかけて妻達者

七十二の俸せ職あり趣味があり

岸和田市 葛城伊三郎

公害を騒いだ人から暇になり

パチンコの足のむくみを医者に看せ

わくら葉の落ちて明日の土と化す

食べるだけ喰べたら下戸は去に支度

鳥取県 鈴木村颯子

閑人に見えても我が田水引中

麦島娘はバルコニーで恋をする
先妻の墓參後妻と連れだつて
開発に浜ヒルガオの狭められ

大阪市 神田秀峰

静かとは此んな良いもの過疎へ来た
陳列にあつた時には色が冴え
特種へ嫌な隣りが耳を立て
独り立ち出来たら今度は寄り付かず

仙台市 川村映輝

腰の線誤魔化しきれぬ年になり
へそなどは狙わず金齒ねらわれる
目には目齒には齒と核を持ち
酒煙草誰れにも敗けぬがまだ浪人

尼崎市 高津徹也

秋風は雨コスモスの雫より
振りかえり少女かわいく恋をする
酔いしれし一座の終るその夕べ
落葉が足早に去り十二月

鳥取県 森田布堂

クロム禍のまた後手となる騒ぎよう
泣きやんだ子が人形に話しかけ
節約のピラ倒産の社に残し
父の顔知らない鳥の子が育ち

守口市 村田瓢太

初盆へ寡夫は飲むより芸がなし

独り子のくせにこせこせ親に似て
一人で仕事しているような汗をかき
病状一進一退残暑きびしゅう御座候

大阪市 西川誓二

科学は科学お伽の月は兎住み
残念な貯った頃はすでに老い
大願成就が入学とは絵馬苦笑
彩る秋を堪能し給う野の仏

玉野市 小谷仙山

愛の一言につきる夫婦の五十年
自棄くそで投げた小石が図に当り
そつと拭く涙一人になりたくて
続ぎ続ぎに咲いて朝顔もうあかれ

鳥取市 大塚豊生

人脈に頼らぬ若さを不安がり
鉄カブト遺骨を抱いたままで朽ち
断絶をつなぎ合わせる血を貰い
ひやひやでやつと握った掌の温み

大和郡山市 森田カズエ

蔓草の根性幹を這いのぼる
年令の差を坂道に見おろされ
いけずではないと一言多い人
レンズ拭く全盲かくす日の眼鏡

和歌山市 内芝としよ

秋晴へ百十二才のおおらかさ

道深く究めて道に迷う日も
腕組んで歩く一夜の宿浴衣
秀才を育てた母が独人住む

和歌山市 沢山福水

燃え尽きた灰の重さが軽過ぎる
灰皿に塗料を溶いて壁を塗り
夜のけもの朝は紳士で歯を磨く
迷路から迷路穴場の狭い道

大阪市 室谷徹舟

孫の句を作る自分になっていた
孫去んで元のペースに落付きぬ
片隅で小さな幸を抱く老後
さりげなくボルノ看板鋭い目

大阪市 神夏磯道子

すず虫の声に読みかけの本を出し
翹ばたいて行く子のために巣を築き
反抗もしたいが母は優しすぎ
黒光りしても若さに魅せられる

滋賀県 溝口はやを

アベックの髭のないのが女です
塵箱のように四方の愚痴を受け
白髪染己も女も偽る気
引金の手で握手してゲリラ去り

堺市 藤井一二三

宇宙時代の世に台風へ板を打ち
父と児の対話などなどは悲し

小松市 馬場魚山

ひも付きのひもがしきりと住居かえ
仕返しに恐いと貝が口をとじ
食べても好い頃は見舞いの足途切れ

姫路市 梅谿庵不酔

そうでしょう私なんかと不貞でいる
ガンバレを心得てますハネムーン
好きな癖好きかと聞けばカブリ振り

伊丹市 小川静観堂

動物の言うことすること人間とおなじかも
初恋は甘酒を吹きふきしてすすみ
鴨川でスプーンなめてた菊之助

兵庫県 河原みのる

起工竣工神サンだしに飲む儀式
ご利やくのわりに罰だけよう当り
朝フット覚めなんだよな死がほしや

出雲市 原独仙

秋は秋の想い出仰山もつ年輪
ぬるま湯のような小言へ出る欠伸
妻の座が錆びつきテコでも動かない

唐津市 新岡回天子

しっかりとみくじ祈って枝に下げ
白足袋をはいた人あり何の宴

古ぼけたカケラ有田の文化財

高槻市

山田季賛

点滴と戦った過去夢に見る

三十秒の誤差病むベッドへ影響せず

内祝鏡待つ順番で氣を痛め

貝塚市

行天千代

まだかまだかと臨月せかされる

男子出産電話の声も上わずって

孫五人自分の年を忘れかけ

神戸市

佐々木静泉

嫌な日になってなかなか日が暮れず

無策なげいて自分の策に陥ちている

自販機が正直すぎて物足りぬ

本田恵二朗

わが近景いい奴ばかりが生きている

わが遠景功成り名遂げた静けさよ

わが借景僕にプラスをしてくれる

この僕を借景にするのも交り

借景にしたりされたりそれで佳し

正本水客

琴の右手おどって姿勢くずれずに

天地人 花のころになる缺

たいくつにたいくつに舞臺まだつづく

京舞の舞妓おんなを匂わせず

三人遣いの人形に足が見えてくる

到来の松茸に酌む老夫婦

庭隅の野菊媚びるを知らず枯れ

秋の酒ひとりの時の孤を愛す

整形の美事さ心は元のまま

威張るだけ威張らせツケを出すマダム

西尾 栗

せつのうてせつのうてサンダル履で来

死んだげるえ京の言葉の死に心地

ときめきが動悸となったシャネルの香

アームアンドアーム糺の森の日暮時

やけくそのような言葉を言うも恋

菊沢小松園

バラ色の頃もあったにわだかまり

焦れ死にした虫も一緒に掃き出され

撓とれば太鼓も鳴らんと身構える

波風は立たぬ聞いては居ないから

毒舌は止みぬ息するのも熄みぬ

若本多久志

越路の旅

ふるさとの夜空こんなに星の数

箸紙にそれぞれの味旅七日

山菜の味も書き添え旅便り

露天風呂独り沈めば虫の声

この旅も浄土へ続く道なるか

尼 緑之助

浜田久米雄

三瓶山にて（二句）

高原の秋を集めてあやめ池
かにの夏終るおすとめす山を降り
機関銃のラッパこの人この党に
寝て起きて二十四時間を追いつづけ
夕顔がばかりと咲いた晩酌だ

・ 近 作 ・

今治市 月 原 宵 明

怒ること忘れ成長だと言われ
Gパンのポケットは裸せにが好き
貫録は軒のかける妻となる
角砂糖みたいに溶ける女なり
無花果を一株残し売る屋敷

上田市 金 子 吞 風

解決は貴女自信と相談欄
藝口を調べるトイレさり気なく
暑かった夏を忘れた菊の出来
本筋に戻したころは時間切れ
少年の無口は母を恋う腫

大洲市 米 沢 暁 明

糸切歯女の力ついと切り

来客へ社長麦茶を汲みに立ち

力んでは見たがしなびた力瘤

傘寿まで生きたい腹をなでて見る

人脈のみんなが金にあやつられ

旅先きで今日の約束思い出し

宵宮の太鼓峠をかけ下りる

正義観損は承知の判を捺す

岐阜市 市 川 鱗 魚

金持ちの白痴をあつかうむつかしさ

二度の職老いにも意地の脂汗

一徹の恐さ女の引き眉毛

押せ押せの無理が理になる立志伝

東京の広さ降るとこ降らぬとこ
池 口 吞 歩

植民地東京訛りも西東

ふるさとの名をつけている店で酔い

今治市 長 野 文 庫

儲からぬ品でせわしいレジスター

頼りにはならぬ他人に励まされ

パパとママなすくり合いの子の不出来

麻生路郎物語

(11)

—三日路亭・遅日莊繁昌記—

東野大八



奈良に遊ぶ路郎・霞乃先生
(昭和初期)

——合の土もまたぬに子が生れ
——子のために買うだけ銭をもっていす
——くもる日に米の騒ぎの夜をしるのび——

(米の騒ぎ) 大正七年八月米騒動のこと・掲載四号より

子沢山のしがな古本屋渡世の中に、路郎はしかし「雪」を出し「土団子」を出した。

この間、霞乃も三人の子供を二人の子守にまかせ、知人のすすめる儘に婦女世界「大阪市西区土佐堀裏町」の婦人記者になった。

「私の娘時代のフリーな生活を知っていた路郎は、私に年中子守とお台所の仕事ばかりさせたのでは寂しかろうとの思いやりからだろうと思います。婦女世界の記者というのもパートタイムの仕事なのです。生花の元や社交界の花形の訪問というのを記事にする仕事でした。世間の事は何一つ教えて貰えず、凡帳の蔭で暮してきたような私には不向きの仕事でした。古本屋のおかみとしての仕事が別口にあるし、手のかかる子供もいた事です

から大変でした。この仕事も結局は、二、三カ月も続いたでしようか」(霞乃書簡)

大正時代も後半の頃は、世は不況を画に描いたような冷え込み方である。そのため、道頓堀筋でさえ貸家札が眼につく有様である。路郎の古本屋葵書店も、この機に盛り場へ店を移すことも考えたことだが、先だつものが

不足に加え、子沢山の病氣貧乏、霞乃も出産つづきで病弱、さらに親戚筋の老女を引取る破目になるなどして、ついに道頓堀進出どころか折角有封に入りかけた古本屋の商売をたため、一家は秋の茶屋三日路へ移り住んだ。大正十年である。

路郎はその前年の秋、大正日日新聞社経済部主任として就職している。このためのふんぎりのつけ方とも考えられる。この新聞社への入社を記念した形でもないだろうが

「大正九年十月二十五日『川柳懐手』出版大阪および東京の奎文堂発行で四六判二〇二頁、大阪柳壇の寂寞を破った刊行物であった」(山柳樓メモ) 時に路郎三十四歳。

この秋の茶屋三日路六六四番地の、隣り番地六六三に岸本水府が住んでいて、木村半文銭もつい眼と鼻の先の町内にいた。「大正十年三日路に住むつくと同時に『番傘』の客員に迎えられた。斎藤松窓、梶元紋太両氏も同じ客員で一緒であった」(山柳樓メモ)

「路郎の新聞記者生活、作家生活はここが始った。路郎の交際範囲の人々は昼と夜を間違えたような人ばかりであった。三日路の私達の家は、『三日路亭』とよばれた。というのは午前十時ごろから、かしわのすき焼や季節物の小鉢で一盃を傾ける面々が毎日のように揃った。夜は夜でその頃道頓堀のカフェーでも料亭でも徹夜営業だったから、五座の前は屋をあざむくネオンとジャズの交錯した不夜城である。路郎の帰宅もおかげで首尾よく戻っても午前四時であった」(九軒の梯子のお供をしたのはこの頃だと思ふ) だから午前五時から翌朝の十時頃までが路郎の睡眠時間であり、執筆の時間であった。その当時の若い作家の作品は、みんな神経衰弱の傾向をおびて

いたのもさこそとうなずける次第であった。
四女奈那は三日路亭で生れたが、線病質の
体質から注意をうけ、紀州は紀ノ川のほとり
へあづけられた。長男ロンドンの生れたのも
この三日路亭であった。

三日路亭時代の後半期に、路郎は外国為替
の研究に没頭した。研究費を出して呉れるパ
トロンがいたからである。不幸にしてそのパ
トロンは急逝した。路郎の仕事もパトロンに
殉死した。路郎の研究は当時財界も大いに
参考になる点があったので、もしこのパト
ロンが長命であつたら、おそらく川柳界から
路郎の名は消えていたかもしれない。路郎が
為替の研究をやめてから桃谷順天館の広告文
案の仕事をした。」（川柳雑誌NO362・古稀
特集号・麻生股乃）

「桃谷順天館研究所ならびに本社工場は大
阪市南区鰻谷仲之町（本誌発行所付近）にあ
つて営業部は信濃町にあった。私（島田兼
好）は、大阪薬専第一回卒業生で、大正九年
卒業と同時に、大槻式校長のご推薦で桃谷順
天館に入社した。そのころの同社鰻谷工場
は、貧弱な施設ながら昼夜兼行の活気溢れる
操業ぶりであった。

やがて鰻谷から市岡五丁目の夕風橋に広い
土地を求めて順天館は工場も営業所も研究所
も一つになってそこへ移転した。職工が五十
人、女工が四百人、研究所員は八人でみんな
不平もいわずによく働いたものです。岸本水
府、麻生路郎両氏はともに広告部に勤務して
いました。私達技術家とはほとんど没

交渉で、あまり話合う機会もありませんでし
た。とにかく広告部の連中は出勤が不規則で
実にルーズでした。水府氏は大正十年ごろ退
社され、福助足袋に就職されました。一方麻
生さんは、川柳の趣味があることなど誰も知
っていませんでした。ご自身も会社では川柳
の話など一度もされたことはありません。よ
く私たちの研究室にこられ、胃剤をわけてく
れといわれました。

私は学生時代からスポーツに関心を持ちな
んでござんていたことから、会社に剣道部
や相撲部、ランニング部を設けることを奨め
全社員は体位向上に資するようになりました。
私は剣道四段の免許を持つていたので、剣道
部の指導に当りました。麻生さんは相撲が得
意のようでしたので、数度土俵に上つてとり
合つたが私に歯がたたなかつた。

食満南北氏の御令兄が順天館本社支配人で
あるため、時折来社されていたらうですが、
食満支配人は私を何かと可愛がって頂き、道
頓堀の歌舞伎見物にもよく連れていつて貰い
ました。」（以上は島田兼好「愛媛県大洲市本町二八
川筆者あて書簡」）

「路郎が桃谷へ入社したのは、夕風橋へ移
転してからのことです。紹介者は時の広告部
長長野時浜氏でありました。広告文案とはい
い、小説でも時でも随筆でも書きこなす才能
があつて、しかしこれを按配する融通性がな
くてはならぬというのが、長野氏の意図であ
りました。それでご自分の補佐役を求めてい

られたのです。この方は各新聞紙上の広告欄
一ページ全部を順天館製品の化粧品を材料に
して歌劇をかくて発表されたこともありまし
た。路郎の入社は、この方のアシスタントと
して入社したのであります。

このころの路郎の失敗談をご披露します。
桃谷順天館の社員慰安会として曾我廬家五郎
一座の観劇会がありました。路郎も社員の一
人だから行つたのですが、あまり早くから入
場させたものだから、開幕までに大変長い時
間があつたのです。

「何もこんなに早く入場させなくてもよさ
そうなものだ」
と思うと急に面白くなつてきて、チビチ

ビ飲んでいた酒がどう回つたものか、
「童子」と異名をとつた路郎は、
「酒顔」のやまたの大蛇みたいのびてしまつた
のでした。五郎が登場するころには、出るた
びに「五郎ひっこめ」と大向うからどなるも
のだから、芝居の係の人達が困つて、酔いつ
よれた路郎を戸板で表へ運び車で拙宅まで送
つて下さつたのでした。後で「あんた、五郎
になんぞ怨みでもおますのかいな」と人にき
かれたそうです。もともと路郎は五郎の芸風
より、ごく自然な十郎の芸の方が好きであつ
たのですが、何も大向うから野次するほどの毛
嫌ひは決してしていませんかつたのでした。こ
んなに前後不覚になつた路郎をみるのは私もは
じめてでした。」（股乃書簡）
やがて路郎一家は鳴尾に移り住んだ。この
頃の転居転宅はしきりのようだ。

「阪神沿線の鳴尾には、空を覆うような大きな柳の木が表前裁にある家で、裏庭は当季、当季の野菜や、観賞用の草花を栽培するのに十分な面積があった。

門下一同はこの大きな柳の木のある家を遅日荘と呼んだ。大阪から電車で約三十分の距離であるが、遅日荘留守で三十九銭損」と松郎氏の句の通り、門下の人達は絶えずこの遅日荘の門を叩いた。

遅日荘主人の路郎は、快活路郎だのブルドックだのと呼称されていた程、性格に烈しいところもあった。仕事に追っかけられている時などは世間並みの会話のやりとりはまどろしいようでもあった。元氣な路郎は、午後九時ごろからでも道頓堀や新世界あたりまででかけていった。子供のくさりにつながれていた私は、そう手軽には出ていけなかったが、夏の夕暮などは子供づれで涼みがてら駅の柵の外へ立った。往來する電車の灯りには都会の匂いがした。飲食地帯へ人々を運ぶ灯りが立樹の影へ消えていったあとは、夜空の花火が消えたあとのように淋しかった。

この鳴尾の家でアトが生れた。梨里が生れた。そして長男のロンドンが死んだ。私達には何もかもが悲しい思い出の種子である鳴尾の家を引きあげ、岸の里へ移ったのは昭和二年だった。ロンドンを亡くして神経衰弱になった路郎は店（桃谷順天館）を辞めた。少しからだがよくなったから著述をやっていた」（川柳雑誌・古稀特号・麻生霞乃）

——その日暮しも軒に雀がこぼるゝよ

路郎夫婦にとつては、この句は哀歎多い鳴尾のころの記念塔かもしれない。川柳雑誌創刊号が出たのもここである。

葛蘭北斎は生涯百回以上もの引越しの記録を持っているが、路郎一家も少くはない。川柳雑誌が軌道に乗ったころの住居、万代西五丁目に落ちついた時が、数えて十四度目という勘定になる。食満南北も路郎に劣らぬ記録の持主で、性格的な一種の「転宅魔」だったらしい。

「私が南北さんに弟子入りした頃は笠屋町だったでしょうか。何しろ南北先生はよく転宅された人ですから、先生が亡くなりになられた時も、やどがえもこんどは番地ないところ。」という路郎の弔句があるくらいです（霞乃）

右の書簡にもある通り、霞乃は父芦村譲りの演劇趣味への関心の強いまま、南北に師事して劇作家を志したときがある。婦人雑誌記者になった当時の事である。その処女作は「ある日の地獄」（一幕）だが、もつともこの労作も長きが故に「土団子」から敬遠され、陽の目もみずに終わっている。

「今その事を申されるで冷汗が出ます。誰でも一寸思い付きそうな筋で、芝居の約束ごとでも何も知らぬ素人が、一幕ものを書いてみようとした厚かましき、穴でも這入りたい気持で、どうぞ忘れてしまってください」

との便りが書かれている。この頃のことを彼女は「土団子」創刊号に「南北さんの二階」

（大正6年春）を発表している。玉屋町の扇湯のあたりに住んでいる南北居を路郎夫妻が訪問するリアルな文体のものである。二階が六畳と三畳で、三畳の部屋で「水府さんが番傘の編束をしていられた」という一節がはじめの方にある。

「南北先生の最初の奥様は物しずかなやさいいお方でした。その奥様のところへきていられた可愛らしい娘さんがありましたが、その娘さんが水府さんの最初の奥様なのです。お二人は仲のよい御夫婦でしたが、奥様は若くしてご長男を残しあの世へ旅立たれました」（霞乃書簡）

玉屋町の水府は、どうやらこの最初の結婚（大正8年4月）のころの若い彼らしい。

食満南北は明治十二年生れ、大正五年以来松竹合名社の座付作者で劇作家として著名。

その交友範囲の広さは関西の各層の有識者に浸透していて、昭和三十一年の南北翁喜寿会誌の豪華な執筆者の顔ぶれは、今だに南北を識る人の語り草になっている。南北は生れながらの川柳人と往時の柳人間でもてはやされ「番傘」は彼を同人に迎えたことによって創生期の基盤を築きあげたといわれている。水府も翁への喜寿会誌に「私の恩人」と公私にわたる翁への恩義を心をこめて記している。

——今死ぬというのにシヤれも言えませず

この辞世をもって風流人食満南北は死んだ。昭和三十三年五月十四日が命日。齢七十八。（前号写真説明の「阪神時代」は「鳴尾時代」と訂正）



八 木 敬 一

俳 風 柳 多 留 廿 五 篇 研 究

一 (八丁) 一

入 江 勇 ・ 青 木 迷 朗 ・ 清 博 美
西 原 亮 ・ 八 木 敬 一 ・ 鈴 木 黄
紀 内 恒 久 ・ 室 山 三 柳 ・ 岡 田 甫

127 数ならぬ身でハくへない初鰹

入江―「数ならぬ身」は、物語、歌などに多く用例がある。

龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男達の参らるる毎に、「時鳥や聞き給へる」と問ひて試みられけるに、なにがしかの大納言とかやは、「数ならぬ身は之聞き候はず」と答へられけり。

と「徒然草」(百七段)に、これはほんとにキザな客だと評定したという話がある。

熊公、八公のような分際では高くてとても初鰹はくえない。

八木―賛。徒然草をふまえていよう。数ならぬとハむつかしい時鳥 二六・14

紀内―賛。「徒然草」は卓見と思う。時鳥と初鰹のとり合せは柳句に多く見られるが、こ

こでも「数ならぬ身……時鳥」をふまえての「数ならぬ身……初鰹」。

西原―賛。さらに兼好が鰹を馬鹿にしているから一段とおもしろいわけ。

室山―礎稿に西原説を加味して賛。岡田―同前。

128 口上を庵室の戸に張ておき

入江―たとえば「しばらく旅に立つので当分留守にします」という口上を庵室の戸に張ておく。あるいは、特定の人物を詠んだものか。これとは逆に、留守を訪ねた者は「庵の戸へ尋ねましたと書て置」(宝十・義2)てなことになろう。

清―賛。特定の人物はない。飄々とした人物の風流。

八木―賛。

草の庵留守へ行脚の置手紙 一六六・29

西原―賛。「口上」は元来「口で述べる」ものであろうが、後に歌舞伎などにみられる如く、「挨拶」ともなったのであろう。庵室の雰囲気よく出ている佳句である。

岡田―賛。一般句。

129 手も足も出してこわく礼に来る

入江―大三十日には掛取の債鬼に責め呵まれて、「手も足も出なかった」奴が一夜明けて元日になると、上下を着てゴワゴワ「年始申し入れます」と年礼に来る。テキストは「こわく」であるが『年中行事』には「ゴワゴワ」として、前後に「ゴワリ」の例句を出してある。「上下の摺れる音」と註がある。「こわく」なれば恐る恐るの意となる。

清「こわく」で良いと思う。一夜明けて事情が変わる。

八木「ふところ手見付へ来るとわけが知れ」(四一八)という句があって、これは罪人が手錠をかけられた状態。

両の手を出して大屋へ礼に来る
手ッ首をなで／＼礼に大屋へ来

四・10

と、主題句は、それが放免されたときの状態。なぜ恐々なのか、それは、

両の手が自由に成ルと店を追イ
大屋から長屋追放になるのが恐いのである。

六・40

青木「八木氏説賛。「手も足も出ない」の成語をふまえての作句ならん。

室山「やはり年の暮というより大晦日から元旦にかけてを詠んだ句であろう。亀のように縮こまっていたのが、年始の礼に来たものと思われる。

岡田「同。大晦日には亀の子のように縮こまっていた男。辛うじて切り抜けて年礼に出たものの、借金を払い切っていないだけに、まだ内心はビクビク。

130 おんみつを出し仲人へ返事する

入江「仲人口は半分に分け」といふほど信用できない。娘の親の方(又は息子の親でもよい)でしかるべき筋に頼んで相手方を調べ

ておいて、それから仲人へ否やの返事をする。「隠密」と大げさな用語を使ったのがこの句のみぞ。現代ならばさしずめ興信所に依頼するケース。

八木「賛。なるたけこういうことは内々でやる。

すり違ふやうに仲人面をし
といった心遣いも不要。

拾一・32

室山「同、いわゆる「聞きあわせ」。これに來られるとご近所のこと、あまりほめても嘘になり、けなせばあとで問題になる。したがってほどほどの返事をせざるを得ない。

岡田「賛。

131 もう六度と降うと下戸ハ精を出し

入江「八専八日」の句か。陰曆で壬子(みずのえね)の日から癸亥(みずのとい)の日まで十二日間。その間に「間日四日」といって、四日間を除くから実際に物事を忌む日は正味八日である。一年六回ある。嫁取り、造作を忌む。また雨が多いといわれる。

駄労解として、下戸の大作をと考えておく。

清「下戸の年始廻り。「六度と降う」は、御降と称して正月三ヶ日に降る雨または雪で、俗に一度降ると六度降るといわれた。

八木「松飾りに雪が降りかかれば、七度降るという俗信あり。

雪までも数を能ふるまつの内

門松ハ白し下駄やはそく／＼し

明四・義1
宝十一・宮1

松の内、年礼に廻っていると雪が降って来た。さあ大変、七度降られては能率が上らない。下戸は先様で酒も吞まないし、精を出して廻るのである。その様子は次の如し。

日の出より日の入迄に下戸の礼

下戸の礼四ッ谷赤坂かうじ町

岡田「八木氏、ご明解。

一三・6
拾一・11

132 越後屋の夷やきもの源五郎

入江「越後屋の夷講を詠んだもの。『江戸名物』に「十月廿日夜講に鯛の焼物」と註がある。

八木「どうもよく判らない。源五郎鯛はビワ湖産である。越後屋は伊勢出身といわれるようだが、どうして近江の源五郎鯛が出て来るのか。

青木「恵比須に鯛はつきものなのに、蛭子講には各商家で鯛を求めるので必然的に値上りする。始祖が江州出身の駿河町呉服商越後屋は、「現金掛値なし」の堅実屋だから、焼魚もお定まりの鯛でなく、琵琶湖産で名高い源五郎鯛であろうとの想像句。

岡田「青木氏が述べているように、越後屋の先祖は近江ですから。

・同人吟・

秀句鑑賞

—前月号から—

尼 緑之助

身構える暮らしへ稼ぐ詩があり

江城修史

高度成長時代から不況へ、小市民にとって
は生活の姿勢をたさなければならなくなっ
た。しかし稼ぐ詩を持つことは力強い生き甲
斐と言えよう。

番犬を飼って他人を信じない

小浜牧人

痛烈な諷刺、住人の風格が浮かんで来る。
犬が好きな人と嫌いな人とは感応が違つて
来るのではあるまいか、私はその後者の方だ
から、ふとそんな気が走る。

わが影に亡妻を重ねて月と行く

工藤甲吉

ととのつた句で、若干技巧的にも感じるが
その陰影に実感が深くにじんできて胸に來
る。作った句ではなく、生まれた作品の強さ
だと思われる。

禿鷹の餌食になった倒産社

大坂形水

倒産にはそれだけの理由があつてのことだ
が、戦国時代の国盗り物語は現代にも生きて
いる。

表現にスキがない。
日の丸とはっきりわかる風が吹き

高杉鬼遊

国旗を嫌悪する小児病患者が一部に居る。
病氣とは厄介なものだ。そんな心情をふまえ
て、風にはためく日の丸に新しい感激を覚え
たのであろう。中七の表現が、はっきり感情
の動きを証明している。

夏祭り下駄と言うのに踏まれて來

村上春巳

若い人には下駄が奇異なしろ物に思えるの
ではないか。夏祭りの気分もずいぶん變つて
來た。商根にでつちあげられたような近頃の
祭りが、あほらしいと思ひながらも出かけて見
たが、一向格別な感情も湧いて來ない。下駄
と言うもの——がポイントで、世相を巧みに
描いた、捉えた抒情がおもしろい。

雲湧けり夏來にけりと言うが如

錦織文子

中七の引用的なのも嫌味を感じない。格別
秀吟とも言えないが、さらりと詠んだ、すが
すがしさに好感が湧く。

噴火せぬ峰を叱って三〇〇回

板尾岳人

金剛山登拝三百回にして生まれた山男の
作、作者の意気と感激があふれている。

乳房のところがり見せびらかすを夏という

小砂白汀

たどたどしい表現が、乳房を強く印象づけ
る。どうしても三回、四回と読ませるような構
成、そして夏の露出過多は乳房だけではな
く、次から次へ情景が浮んで來る。

下五の夏という、のは説明語でもの足りな
いが、この句の場合、「どうだ」と言わんば
かりのしめくり役を果している。

歩き方が悪くてアベック吠えられる

有信新之助

「歩き方が悪くて」幼稚とも思える句語だ
が、これがユーモラスを誘ひ、アベックの状
況まで活写されている。

即発の女 妬心を白くぬる

藤田頂留子

下五「白くぬる」は感情を白くぬる、象徴
語なのか、それとも、白粉を濃くぬるとい
うことであるのか、判じがたい。或は両者に
まがって訴えようとしているのであろう。
「即発の女」が強く正面にクロイズアップさ
れているので、白くが凄味となって來る。

仮縫いへセザリシもある賞め言葉

山川阿茶

梅干せば母のにおいがつんとかる

堀江芳子

女性ならではのものの、前者はその心の動き
が微妙。

後者は下五で生きて來た。

カーブ勝ちそうでビール冷やしとく

森井菁居

フアン氣質が卒直に動きはほえましい。

・水煙抄・

秀句鑑賞

—前月号から—

水粉千翁

『秀句鑑賞』。それは互選論者である私に敢て鑑賞の機会を与えられたのであらう。

私がかねて川柳は十七文字という『手段』で表現して余情を求める文芸だと自解して来ました。そして余情の長さによって句の格付けをするということを選句上の至上命令として来ました。十七文字という『手段』で表現するなどという『手段』が叱られるかも知れません。勿論表現力の巧拙も大切なことであることは私にも判りますので但し書として申し添えることにいたします。しかしあく迄も川柳は余情文芸であると思っております。川柳塔誌をひもといて、私を含めて多くの人が『水煙抄』の作品はいいなと云います。それは同人作品がマンネリ化しているというような見方ではないことを付け加えておきます。

水煙抄の作品には迫力が感じられると読む人は云う。普通会員意識という立場から、あ

る目標への過程で創作との間いがあるからかも知れないと私は思う。私もいつも水煙抄を再読して勉強をするための糧としているのであります。しかし、今号の作品は正直に云って珍らしく低調であったと思うが大方のご鑑賞は如何でしたでしょうか。私に与えられた『秀句鑑賞』としては実に残念に思います。

白桃を剥くとき心よぎるもの

堀口 欣一

心象のひびきある作品として鑑賞したい。私のふるさとは白桃の産地である。熟度の未と完の中間がもっとも適味とされていくが、やわらかい肌は肌の極致である。その肌を包む薄い外皮は、その剥ぐときの呼吸こそが大切である。しかし落ちついて剥ぐとき、極めて素直に剥がれるのである。その呼吸のつくくひとときの静けさの中に、心よぎるものを感じて見つけたのであらう作者の繊細な心のうごきに、私も共感を覚えるのであります。

ハンガーに吊ると道化師泣けてくる

小谷 葉子

『ハンガーに吊ると』は素顔になった一人の道化師である。全身を打ち込んで笑わねばならない道化師と、素顔に流す涙との両面を『ハンガーに吊ると』と表現して余情を含むこの作品のうまさに敬服したい。

合鍵を互いに持ったまま別れ

池田 香珠夫

川柳人誰でもこの作品を共稼ぎと見る者はいないであらう。その通りである。別れなければならぬ事態になったとき、それが友情であらうと、恋人であらうと、時にそれが夫婦であらうとも、人間である限り、心の合鍵を持っている筈であることをこの作品が訴えている。

子に職がまとまる知らせ独り酌む

伊藤 静枝

『独り酌む』に汲めども尽きぬ父の情感が湧いてくる。私はこの作品の構成上から『子に職が決った』が一般的な作品になり勝ちだと思う。そのときの句の価値は半減どころではなくて、極めてつまらぬものになつてくると思う。『まとまる』ところにある長さの余情が出て来ていると思う。

約束のはかなさ夢を抱いて寝る

有田 鹿の子

約束を裏切られてもなおきらめることなく夢を抱く、『はかなさ』に句韻のすばらしさがあると思う。

そのほか鑑賞する作品が私の目に止まったのが次の句でありました。

すねた眼が女心をうちあける 谷岡 芳枝
フォークボール投げて女は横を向く

自由席妻の隣へ掛けさせず 真山 国彦
鈴つけて貰って猫のひとりぼち 大林 曲ん手
岸本 無人



菊沢小松園選

八尾市 田 中 紀美代

庶民的などと無理矢理喋らされ

割り切っているのにくどい詫び電話

揺れている女ごころが活けてある

雑草が詩もち寄って秋らしく

選り好みしてて美人の独りぼち

備前市 武 内 雅 堂

予約した座敷明治は飲み直し

人妻へボスはなにかと世話をやき

フオードの笑顔が消えてゆくニュース

暖かい心にふれる旅づかれ

物を言うときは大人の貌になる

宝塚市 吉 田 とんぼ

一泊の留守を氣にする妻の旅

キャンパスをもうはみ出した入道雲

こおるぎのコース夜空の月も冴え

予定日を報らす電話の声はずみ

尼崎市 中 谷 利 美

辞退する母へ不服な食べ盛り

とりあえず臭いものには蓋をさせ

ビールなら飲けます嫁でお氣に入り

迷惑と知らない母のかまい過ぎ

どう装ってみても背中が泣いている

遠廻しな愛でも明日へ続いている

おめでたい姿で鯛が跳ね上り

ここでこう言えば私の負けになる

大阪市 小 谷 清 女

何時か無に還る体を飾り立て

力む事やめて葉に遠ざかる

地味好みタンスに無駄のない暮し

現実のきびしさ知らず産声あげ

名古屋市 大 林 曲 手

貧しくも親には上の上を取り

本文で匂わせ二伸で念を押し

糠味噌へ鬼千匹を近付す

忠告の通り生きてもうとまれる

河内長野市 井 上 喜 醉

口だけの愛へホステス笑うだけ

一肌を脱げば責任みなかぶり

雑草は一人で育つ自信持ち

正論へ大物巧く休かわし

大阪市 松 本 甫 久 路

さざ波のひとつひとつにある夕陽

見えすいたうその尻尾を踏まれてる

平凡にその日を暮らすむずかしさ

恩讐を超えたつもりが恨みごと

今治市 真 山 国 彦

冷房がドキンとさせた電気代

お返しに気を使わせぬ品を呉れ

ゴキブリを叩く時にも出る個性

叩かれる前にゴキブリひげを振り

弘前市 小 山 内 貞 男

野仏に無事を祈って登山靴

算盤で検算される計算器

ダイヤルで心を結ぶ飯場の灯

酒好きな先生に見る人間味

大阪市 堀 口 欣 一

つるつるに禿げて眉毛の素晴らしさ

夜行バスみな旅馴れた顔ばかり

華麗なる静寂という遺作展

敬老の日を入念にヒゲをそり

寝屋川市 江 口 度

風鈴にまだまだ夏がぶら下がり

排気ガスにむせてぎんなん一つ落ち

かび生えた葉先輩から貰う

蟬はなく残り少ない木にたかり

岸和田市 池 田 露 子

ささやかな抵抗妻の黙秘権

いざないの毒矢が胸につきささり

も一人の私が彼を茶に誘う

岡山市 船 越 洋 之

葬式の写真と決めて額も決め

片親の娘に厚い便り来る

胡桃にも弱いとこあり真二つ

川西市 野 田 登 代 子

ニットにも情熱をかける細い腕

二日酔い皿を洗って詫びている

再会の徹夜のおしゃべり許してくれる

高槻市 山 田 ス ミ 子

泣く子には勝てぬと笑わせておく

言葉少ない長男へ気を使い

あちこちによい顔ばかりしておれず

老夫婦禅問答で用が足り

ルール無視小さな勇気出しそびれ

八戸市 安 田 紘

朝飯の美味しさ四十女の恋

富田林市

中村

優

経本の釈迦に問いたい日の迷い

悲しみを隠す化粧と露知らず

豊作の風に打たせる大太鼓

和歌山市

樫

村

ふみよ

ぐちも背へ流すタクシー運転手

美しい故になぞめくサングラス

ささやきの耳もそろそろ遠くなり

唐津市

田

中

三男

へっつい猫うかつにも毛を焦し

園芸の発芽をレンズ探りあて

憎かろうはずが無い子を叱りつけ

柏原市

小

谷

葉子

凍る夜のせてやな川妻の宴

秋風を掬う心の片すみで

七曜のプラン浮気もいたします

大和高田市

岸

本

豊平次

戦中の話で歳がばれちまい

肩書きの数が櫛の列になり

親切な傘で互に肩が濡れ

鳥取県

谷

岡

芳枝

枝振りの松を支える根の遊び

鈴虫は声はり上げて秋を読み

音もなく開く芙蓉の憂を見る

鳥取県 堀

江

蓮

不況風官庁だけはよけて吹き

三枝の礼識って国宝に糞をする

めでたい日花瓶も盛装してもらい

熊本市

有

働

芳

借りがまたできて切れない腐れ縁

よきに計らえ社長落日のクラブ振り

キャンパスへせて嫁ぐ娘描いておき

倉敷市

高

山

みどり

善光寺拝んで来ましたそばまんじゅう

みやげ話信州林檎が香ります

頂いた鞆開け閉め枕元

榎原市

西

本

保

責任の無いのが取得の平社員

言いたい事言わしてもらうもう停年

勿体ない性分めけぬ貧乏症

寝屋川市

柴

田

恵美子

小鍋立ての季節待ってる差し向かい

ハワイから一寸バタ臭さつけて降り

野崎さん東海林の唄も遠くなり

豊中市

高

橋

古

月見草吾が半生は酔うたふり

仲秋の下戸には下戸の月があり

一桁が違うゼロだと威張るなり

八尾市

納

史

葉

悲しみにとける絵具を持ち合わず
愛憎の果てにナイフが置いてある
従順な母も姑の顔を持ち

和歌山市

西山幸

その人の為に身を退く愛なんて

保護色のつもりで油断青蛙

不幸をば測る物指ばかり取り

京都市

清水拓味

幸せな晩年の顔と露地で遇い

保証人の一人は妻でよいという

成長の子へ錆びた鉄になつておき

和歌山市

桑原道夫

どうにでも出来る自由をもてあまし

足一本取れたのも居る蟻の列

宿浴衣下駄脱げかかり脱げかかり

鳥取市

有田鹿の子

いさり火が見えて故郷を知る夜汽車

草刈ればカマキリに小首をかき上げられ

切れかけた夫婦の糸を守り抜き

今治市

大本バット

後姿へ好き好き好きと小さく呼び

一刷毛の雲が天守を秋にする

香港へ日本の恥を捨てに行き

今治市

古野伶人

安かったからとネグリジェ派手な柄

白鳥も家鴨も差別無いお堀
百円の宿のテレビの途中で寝

鳥取市 岸本無入

書道展出てから看板見て歩き

D51の魂ぬいて鉄にする

よそ行きの言葉になった貸衣粧

兵庫県 高橋近江

長男の嫁には遠いバスガイド

農継がす話はよそう米価密

隠居所へ左遷されてもある人気

東大阪市 野村白風

秋口になって扇子を二本くれ

面談が筆談となるよい話

このほかに生きる道なし渡し守

須賀川市 平栗金太郎

貫禄は無いが人間味が溢れ

味の無い水に都会と田舎の差

ホームバー年上の妻酔いつぶれ

寝屋川市 福富隆子

ちよっぴりの火災保険が遠出する

買いだめの味のさがった米にこり

万円に従う水禍に水びたし

鳥取県 飯塚虎秋

欲しいとも言えぬうなぎの値段聞く

トンネルを抜けたところに海光る

神話抱くあの岩壁へヘリがとぶ

松江市 梅

本 登美也

としよりをまごまごさせるバイキング

鉢巻で運転してのボンコツ車

名も末の一字を入れて生み納め

竹原市 鈴

木 かつ子

天に月地に私の夢一パイ

缶切りを借りて入院友が出来

あの岬まわれば故郷の波の音

尼崎市 大

垣 たもつ

踊り見にゆく氣にならぬ初灯笼

見る阿呆と共にタラップ隆ろされる

酌のないコップ独りの夜を閉じる

岸和田市 池

田 香珠夫

鍵ッ子に日暮れが早い遊園地

風ゆれのテンボが違ふ葱坊主

無住寺の庭にこぼれる萩の花

鳥取県 安

達 潮 音

追悼会去年いっしよに踊りの輪

余生という齡に年金うすい味

先輩の死を誌上で知る

ありし日の面影のせて遣句ほおう

吹田市 藤

原 世史春

ゼンマイで動くようにゴキブリ突っ走り

使用人に使われている 錯覚

夕立を忘れたような虹の色

新宮市 西

尾 功

あんな時あったと波打際の恋

釣針は嫌いまき餌を喰べてます

羽曳野市 麻

野 幽 玄

秋の花鉢に咲かせて病める窓

金使う術を知らない預金帳

高槻市 竹

内 花代子

物価上昇財布のひもをしめてても

つくろつて見てもやっぱり歳は歳

姫路市 大

原 葉 香

求人ので告不況に字も細り

ゆうだちへ西瓜の種のもどかしう

橋本市 森

脇 善 彦

子には子の荷物をつくりキャンプする

向上心エンピツ一つ無駄にせず

岡山市 長

尾 保

罪犯すスタートだったかも知れず

現実の歩巾に合わす靴がない

高知市 竹

崎 寛

どないになるやも知れぬと愛してる

銭もって行かねばやっぱり遊べない

尾鷲市 渡

辺 伊津志

ふる里に送る小銭を振ってみる

階段の踊り場にある恋のわな

堺市 栗本 藤持
福引も孫の無心は知っている
古稀過ぎて祝う人なく誕生日

大阪市 欄 蘭
照れくささ見た半分ヌードショー
もう水の争いもなし過疎の村

唐津市 三 浦 広 坊
投票を押し頂いて金とられ
メーカーは上手に嘘つく知恵をもち

唐津市 岩 下 照 沖
秋深し他人のごとき妻の顔
やがて飛ぶ空をボーフラ見に浮び

七尾市 松 高 秀 峰
預金利子下る上るに縁遠く
社会党の市長もやっぱり増税し

豊中市 安 藤 寿美子
暑いなといえばクーラーあれへんの？
喜びをこぼさぬように指にぎる

松江市 本 庄 快 哉
半分は売れるつもりの自費出版
暑中見舞残暑見舞で出す返事

大阪市 内 藤 ますえ
釣仲間釣れた方から話しかけ
仏像に英字も添える奈良京都

大阪市 須 浦 つ ね

計報来る朝は茶柱立ったのに
根無し草川の流れに逆わず

東大阪市 崎 山 美 子
景品の金魚はひとまず洗面器
命あるかぎり鈴虫鳴きつづけ

堺市 松 永 溪 路 朗
蟻の列六根清浄富士の山
雲海を見下す富士へ仁王起ち

島根県 岩 田 三 和
老農の目にはたずなゆるんどる
欲の虫白血球よみんな食え

愛媛県 小 山 悠 泉
ほんとうの味を常連言うてくれ
悪いとこ切れとお医者ほ他人なり

新見市 吉 田 落 猿
遠回りして虫の音を絶えすまい
一匹の蛾にもいのちのおきどころ

新潟県 市 川 一 峯
流行は猛暑の中をマキシの娘
盆終り元の過疎地に逆戻り

大阪市 平 井 露 芳
小さい秋小さい虫が運んで来
六価クロム地図に黄色の色をつけ

諫早市 江 副 二 牛
お互の短所も風化老夫婦

敗戦の秘話も悲しい尋ね人

滋賀県 柚木踏草

紙くずに縫り弁護士苦笑する

風鈴が夏は過ぎたと告げる雨

今治市 伊藤一郎

お墓への道だけ草が刈ってあり

好き勝手言うて退院しながらず

今治市 今井松花

趣味が金になって目の色まで変り

上って下りて変哲も無しおらんだ坂

松江市 岡崎雪美

糟糠の妻で我が家の味が出来

自分だけわかる理くつできらわれる

鳥取市 勝山紫宏

呱呱の声父となる耳つきぬける

細い糸辿って赤いバラが来る

和歌山市 松原寿子

冴えた星じつと見つめて妥協する

煩惱を外らせば枯野となる女

唐津市 山下勝一

老人天国一日だけの敬老日

ベトナムが済んで韓国ノイローゼ

今治市 園部正則

原爆記念日を迎えて

八時十五分までは両親生きていた

すれ違い女は女の匂いさせ

大阪市 横地正彰

快速という単線で待たされる

Gパンの腰くるりくるりと人を分け

泉佐野市 大工静子

正直な作文新聞に拾われ

堺市 堀畑日子

女性でも肩書多い名刺出し

伊丹市 檜谷漫柳

ごまかしの笑顔は隅で歪んでる

八戸市 島田昭治

呼び捨てて鍛えてくれた方が逝き

今治市 薦本昌道

匂いなき花を思わす寡婦の城

唐津市 田口虹汀

灰皿にキット刑事の眼が光り

鳥取県 加藤茶人

変わりなく届く賀状で知る達者

鳥取県 伊藤藤静枝

雑草の底力持つ子に育ち

大阪市 花田繁子

箸おけば寝ころんでいる老い見つけ

大阪市 村島秀村

初登校色の黒いを自慢する

赤穂市 谷口赤童

丸金の腹当てしている写真出し

羽咋市 三

宅 ろ 亭

尼崎市 小林 文 月

大丈夫の積りの奥歯揺るぎだし

大阪市 新

川 貞 祐

お見合いは力士の仕切りに似てきびし

海洋博伊丹で待つと誘われる

唐津市 岩

崎 栄

木の葉散る様を不況の世とも見る

唐津市 簡 井 朴 竜

前書きの句はやめよう

直原 七面山

梅谿庵不酔氏が本誌五六七号に「各柳誌を發展させるには」を書かれ、その中で「どの柳誌を見ても、句の前に註書がついているのを多分に見受ける。僕はこの前書きが一番きらいである。註書をせねば判らぬような句を作るなど僕は云いたい」と。私は全くそのとおりだと思ひます。

そもそも前書きつき（註書）の句なるものは、元来私的な、いわば私ことの句であり、日記にでも書きとめておけば、こと足りるものであって、決して人前にさらすべき句ではないのだと私は思っております。

またこれらの句は、前書きという一種の支え、即ち松葉杖がなければ（その句だけでは相手に句の意を充分理解して貰うことが出来ない）おそれがある（で）独り歩きの出来ない未熟な句であつて、いふなれば不完全な句、全くの欠陥句なのです。

さてそこで私は念のために、丁度手許にあった川柳塔誌の一冊を取り上げて調べてみた

のですが、私は腰を抜かさんばかりに驚いてしまいました。その雑誌の約五〇〇句中に前書きの句が驚くはなれ五〇句もあるのです。しかもその中には、五句に五つの前書きがつき、四句に四つの前書き、三句に三つの前書きがついている。私ならずとも驚くのがあたりまえでしょう。

前書きつきの句の方が、独立句に比べて、選者に抜かれる確率が非常に高いということとは、これは私の過去の経験からみても、これは動かすことの出来ない事実です。

そして不酔氏は「温古卑新」ということにも言及され「水煙抄」の欄には、前書きつきの句はただの一句も戴いていないのです。うか。「温古卑新」でなければと心配です。さて本論の前書きなのですが、中にはどうでもいいものまで。叔母入院とか、初孫誕生とか、桂浜にてとか、奈良に遊んだとか。そこでこれらの句を鑑賞させて頂く側から云わせて頂けば句主の叔母さんが入院されようが、桂浜に遊ばれようが遊ばれまいが、鑑賞者にとってそれらは全く無関係で、しかも無縁の世界の出来事なのです。

句主がどうしてもその句を發表したいと思うのでしたら、私はその句を一読したら、前書きつきで予備説明をしなくても、その前書きの意味が充分その句の中にくみとることの出来るような、そんな立派な句をどうして創って發表なさらないのか不思議に思われてなりません。

また私には、こうした前書きつきの欠陥句を何故選者がどんどん抜いているのか、その辺のところがよく判りません。

さて、いよいよここに私は、川柳塔社に対して（皆さん）一つの重大な提案をしたいと思ふのです。それは「今後一切川柳塔社の柳誌には、前書きつきの句は載せない」と云うことです。

したがって今後は、投句者の方は投句をしない、例え投句があつても選者は抜かないと云うことにして頂きたいのです。

なぜ前書きつきの句を投句しなければならぬのか、何故そうした句を入選句として取りあげなければならぬのか、その事情と根拠など具体例などをあげて説明頂きたいと思ひます。（9枚の原稿を3枚半に縮小したことを執筆者と読書諸氏におことわりしておきます。——文責編集部）

百人一首と川柳 (17)

富士野鞍馬

五五 大納言公任

たきの音は絶えて久しく成りぬれど
名こそ流れてなほきこえけれ

(拾遺集・千載集)

公任は藤原氏。三条太政大臣頼忠の子で、
權中納言定頼(六四)の父である。四条大納
言と呼ばれ、長久二年(一〇四一)七十六才
でなくなった。

この人は、音楽、書、詩、歌をよくし、貫
之、定家と「中古の三歌人」と称せられた。
「三十六歌仙」「和漢朗詠集」はこの人の選
である。

文句取りに

琴の音が絶て久しくきこえねば

― 労咳の娘― 琴の音も止んで格子に

わるい咳(一〇二木綿)

五六 和泉式部

あらざらむこの世の外の思ひ出に

今ひとたびの逢ふこともがな

この歌は「拾遺集」に「心地例ならず侍り
ける頃、人の許に遣しける」と詞書してのつ
ている。「人」というのは誰のことかわから
ないが、病中の作で恋歌である。この文句を
取って、

あらざらん此世の外の嫁いびり(五四四)
と川柳によまれている。またその名に因ん
で、

たんと出しそうな名いづみ式部なり

西澤(末二九)

と戯作されている。

和泉式部は、越前守大江雅致の娘で、和泉
守橘道貞の妻となつて「和泉式部」と呼ばれ
たのである。道貞との間に生れたのが小式部
(六〇)である。その後離婚して、冷泉帝の
第三皇子、彈正尹為尊親王に愛されたが、親
王の没後、第四皇子、宮教道親王に愛され
た。この教道親王は、式部より五、六才年下
で、その恋愛の消息を記したものが、有名な

「和泉式部日記」である。寛弘四年(一〇〇
七)十月、帥宮は二十七才でなくなつた。
それは式部にとつて大きな打撃であつた。そ
の翌々年、道長に召されて、一条天皇の中宮
彰子に仕えた。その期間は、詳かでないが、
後、道長の家司藤原保昌と結婚した。

保昌が丹後守で任地へ下る時には同行した
が、万寿四年(一〇二七)大和守に転じ、更
に摂津守をも兼任するころは、式部は京都で
すくす時間が多く、たまに夫の任地へ遊びに
行く程度となり、不満、不和を生じて離別と
なつた。それ以後の消息はわからない。

信州下諏訪の来迎寺にある鉄焼地蔵の縁起
によると「金子村の百姓の娘かねが地蔵信者
で、都人につれられ、大江雅致の娘として、
天延二年大内に召され、後、和泉守橘道貞の
妻となつて和泉式部と呼ばれた。そして信州
の地蔵尊を都に遷して守本尊として信仰して
いた。それを後年、北条時頼が廻国の途次、
式部の旧草庵に宿り、地蔵尊のお告げをうけ
て、地蔵尊を背負つて、信州下諏訪の来迎寺
へ納めた。」とあり、それで川柳は、

定家卿地蔵尊をもゑらみ入れ

玉章(三一七)

百人に一人はさいのかはらなり

芹丈(三一八)

観音と地蔵百首に入らせられ

文集(二九八)

と式部を地蔵尊にしている。観音は紫式部。
式部が丹後へ行っている間に、娘の小式部
が、宮中の歌合せで、「大江山いく野のみち

のとはければ、まだふみも見ずあまのはし立」と詠んで、権中納言定頼（六四）をやりこめたので、

大江山後チのたよりに母は聞き

喜柳（二四五）

と川柳にある。

夫保昌の弟が、盜賊袴垂康輔であるというので、

ぬす人のしんるいも居る百人一首

（天八宮一）

盜人の兄嫁歌が上手なり

芹丈（二九四）

兄嫁に歌人をもったふてへやつ

玉章（三二四）

白浪のうわさ式部が来るとやめ

五連（二二六）

女シリーズ

菊沢小松園

寡婦という笑凹も噂にのぼるなる

気がつけば右も左も女なり

一生に一度の返事うろたえる

うしろ姿ばかり覚えていたる女

叱られる覚悟で女戻つてき

うしろから見詰られてるのを感じ

くちづけは夢の中だけ許される

止り木の役目はすんだ喪服ぬぐ

小舅の袴に式部度々こまり

香貞（五四三）

おぢ様といふなと小式部を叱り

（二六五）

門トの外よせなさるなと式部いひ

（二六三）

後、京都新京極誓願寺に入つて尼になつたともいわれ、そこに墓がある。

いづ式が来たよとそるせいぐわん寺

（安六義六）

紫もいづみもとかく寺はいり

（明八松三）

石山のせいぐわんじのと寺はいり

（三二六）

—石山は紫式部

謡曲「東北」に「此寺いまだ上東門院の御

おきて掟がん字がら目という女
かかる時キリスト何とのたもうや

島の初秋

嵯岐光武弦太朗

路郎忌の緑樹を越ゆる雲の峰

米の花風に揺れるよ赤とんぼ

紫のりんどう秋は花屋から

秋風颯々海峽の月研ぎ澄ます

メスよりも鋭く織き二日月

漁り灯へ三日月弦を引しほり

時、和泉式部此梅を植え置き、軒端の梅と名づけつつ、目離れせずながめ給ひしとなり」とあり、

みづからが植えた梅だと式部いひ

（天二義二）

すいものがいづみ式部はきつい好き

（明八信一）

「御堂の関白この門前を通り給ひしが、御車の内にて法華経の譬喩品を高らかに読み給ひしを式部此門の内にて聞き」

軒端から耳をすまして式部聞き

（天四八・五）

車の中でにやにやむにやを式部きき

（安四仁三）

譬喩品を式部は門の外トで聞

青露（六一八）

磯牛の脛にひたひた秋の汐
手折られていちじく白き涙する
椿の実夕陽に紅い頬を染め
グラビアの皓齒くちびる美味しそう

時事川柳

土掘ればクロム・水銀・砒素・ヘドロ

しぼられて廃油烈火の憤り

コイデラン燃えぬ繊維が火の車

言や善し首相人畜無害居士

雷神の縄張り犯す茸雲

不況風女子大卒に狭き門

腕み合うスエズにキ氏の名裁き

愛染帖

橘高薫風選

石仏を刻む石仏の顔をして
 梅干の赤さよ今日も熱高し
 残像の女なまなまと曼珠沙華
 食祭市 小野 克校
 父の忌へ朱より赤き彼岸花
 久しぶり真正面を見た夫婦
 化粧していない女は勇者かな
 岡山市 行本みなみ
 屍の高さで犬と食っている
 惚れぬいて死んだと書いてくれますか
 八尾市 高橋 夕花
 赤ちゃんが笑ひマリアの瞳が笑う
 木馬が廻る心も廻る淋しくて
 東京都 山根 白星
 本当の長さで蛇のことされる
 ひらひらと旅路の果てに散る落首
 岡山市 船越 洋之
 アラジンのランプではないクレジット
 岡山県 白岩 文衛
 風蝶草 一と夏のドガの踊り子
 風蝶草 パンセをわれに問いしひと
 神戸市 和田 恭子
 生き延びてまた会う秋の花の彩

魁夷画く屏風のような今日の山
 竹原市 三宅 不朽
 野火ふつとイクサのいろに見えてくる
 虫籠のいのちたしめ解くネクタイ
 大阪市 小出 智子
 日曜日象は子供がほしくなる
 豊中市 奥谷 弘朗
 平凡な日課に野心の芽がつまれ
 マルクスかなエンゲルスかな梨の芯
 島根県 鈴木村 諷子
 金属音妻も鎖と思う日や
 名古屋市中 大林 曲ん手
 社会鍋囲りの金は入れてなし
 島根県 勝山 紫宏
 縄のれん鎖はずしたものの同士
 大阪市 西出 一栄
 残夏初秋お好み焼きにかき水
 島根県 安達 潮音
 看護婦の口紅生きていること
 八尾市 宮西 弥生
 月よりの馬車で死者に逢いに行く
 マニキュアの昔もあつた尼の爪
 食祭市 水粉 千翁
 月斜め寝顔は母を叱るのか
 何色の夢追う寝顔かな旅路
 岡山県 出原 敬一
 蝶去れり風の路線を踏みながら
 扉を押した少年語尾を探している
 八尾市 大路 美幸
 三日月に屍さらす男の死
 スキップで三途を渡る死は来ぬか
 大阪市 河野 君子
 真実を言いつぎた日の月明り

未来図を塗るもはや淡彩色ばかり
 島根県 錦織 文子
 点景へ女は過去を置いて視る
 風が来て湖に聞かせる今日の唄
 八戸市 小泉 紫峰
 孫叱る嫁を叱って孫と出る
 愚筆に雅印を押して気が和み
 尼崎市 黒川 紫香
 酒飲まぬ日をあやしまれあやしまれ
 飛び起きてしばらく居所たしかめる
 香森市 工藤 甲吉
 二人渡った橋を一人でさみしがり
 さいはての砂丘は人の影も見ず
 高槻市 若柳 潮花
 三味かけて昔のことは喋らない
 師匠から見ればまだまだ遠い道
 香川県 三井 酔夢
 人恋し無心の酒になれませぬ
 島根県 小砂 白汀
 初恋の乱数表にイニシアル
 富田林市 岩田 美代
 可笑しくて嬉しくて息子の髭である
 島根県 堀江 芳子
 溢れそうな喜び瓶に詰めたくて
 堺市 高橋 千万子
 愛かなし焼香順にない女
 神戸市 小浜 牧人
 臨終の部屋に時計がうごいている
 大阪市 正本 水客
 自分の影がすなおに従いて来ない日を歩く
 今治市 原田 一風
 自縛するルールがあつて楽しめる
 具塚市 野坂 つき子
 サルビアに負けて女から告白
 大阪市 神夏磯道子

閃いた日からの長い二人です

係長急所にふれず説得し

元娼婦とは思えぬ落つき振り上品

港町一人残って居た芸妓

新聞を捨てた座席へ来て座る

押しつけてゆく人生にコップ酒

ちゃんとズボン穿いてる秋の冷え

その自戒崩し女の顔となる

かの人の背中へ指で人妻と

老人会長老人を慰問する敬老日

心はずまぬ日の鏡の顔をぶってやる

政府の縄はじわじわと首をしめ

喪服着て心の色を隠してる

椅子の背に顔を埋める日が続く

掌の上で遊ばすてんと虫

補乳瓶母の温みは消えている

今治市 伊藤 一郎

岡山県 直原七面山

今治市 真山 国彦

岸和田市 池田 露子

松江市 本庄 快哉

島根県 堀江 正朗

富田林市 和田維久子

伊丹市 小川静観堂

東大阪市 竹中 綾女

島根県 榑原 秀子

松江市 岡崎 祥月

和歌山市 西山 幸

大阪市 新川 貞祐

高槻市 竹内花代子

岡山県 長尾 保

機本市 森脇 善彦

今治市 今井 松花

鳥取市 河村 日満

神戸市 田中 要保

今治市 月原 宵明

今治市 大本バット

西宮市 朝山千世子

倉敷市 高山みどり

尾鷲市 渡辺伊津志

滋賀県 柚木 踏草

今治市 曾我部曉嶺

西宮市 藤村 メ女

東大阪市 竹中 肖二

和歌山市 津田 与史

名古屋市 吉田 水車

倉敷市 能登原白水

あの嶺に吾が心音のある限り

プレゼント敬老の日が氣にいらず

新幹線の別れ手を振って頭下げ

武内 雅堂

縄

現代川柳研究誌・宮田あきら編集
▽季刊第一号／発行所・〒601京

都市南区東九条西河辺町三〇―誌代四〇〇円
(千共)川柳の文学運動への情熱が見える。

富田林市文化祭川柳大会

日時／十一月三日／会場／富田林市民会館3F／集・恵美子選／酒・千尋選／祈る・

冬二選／葉天家・薫風選／昇給・榮選／特別課題・柳太選／市長賞・各題賞多数／

振り返ると空を仰いでいたカラス

おむすびの美味さよ海より出でし手に

盆踊り肩に夜露の重さあり

夏の終り一つ咲いてはひとつ病む

前号の高橋千万里さんの句、「虫乏し蜘蛛もどこかへ越す構え」と訂正します。

投句先 〒560 豊中市中桜塚3丁目13
15. 橘高薫風宛 (一人三句)



医師 若林草右

よきデーター一つもなくて今日も暮れ
瘦せ細る腕 廻診をにぶらせる
仁術は死にたいものに息をさせ
お医者はんが病気でつかと見舞客
灸あとで前に診たのを思い出し

第一第二句は路郎先生が、昭和四十年三月三十一日、大阪日赤へ入院された時のもの。初めはかりそめの黄疽と見られていたのが、データーが揃うにつれ事の重大さがひしひしと感じられた。愛用の蒙古の王族から貰われた彫刻の象牙の箸も使われぬ日が多く、衰弱は眼に見えて増し、たださえ細い先生の腕は竹のようになり、廻診の足を鈍らせる。春果博士も見舞に来られ、いろいろ助言を頂く。ご高令と心臓に不安があったので手術は無理と決定。癌の診断とともに、未完成の庵に最後の筆を振うため、療養を犠牲にして退院した知人の画伯の芸術家としての態度の立派さを涙ながらに語られながら、五月十四日に退院されたのは、ただただ申し訳なく、先生のご心中をお察しして暗涙に咽ぶのみであった。

会社員 中村ゆきを

一斉にあいさつの声新入社
定刻に退社残業で家に着き
出張をしている筈の人に逢い
雑用にふくらむ力パン持ち歩き
廻り椅子汗の尊さもう忘れ

経理マンといわれ、「財務諸表」を睨み、おかたいといわれて二十余年。何んの因果か、数字相手の毎日では人間が片輪になりそう。新入社員歓迎会や、春秋のリクレーションでは、率先ハメをはずして隠し芸。男四十六涙ぐましいサビズも美人O・Lには通じない。どうせ昭和一ケタの心意気など分かつちやくれぬ。今宵もたどる飲屋街。身を隠すように潜った暖簾の温み、独りかじるは蛸の足。どこやらの係長らしいのも眼鏡ずらしでぶつぶつ云いながら湯豆腐に語る。「御同役ノそなたもご苦労でござるなア」お互に、すまじきものは宮仕え。ヘツライ浮世のこの裏町を：独りししみじみ飲んでいる秋である。



地方公務員

小林孤呂二

働ける裸のすみずみまで眺め

出る杭のたとえに耐える日もありき

この汗へ悔なしヘルメットをはずす

そんなずるさ罷り通る世で酒があり

心の座標XにもYにも傾けず

戦後、再び市役所へ還ってきた頃は、若さに任せてがむしやらに、仕事をしたものであります、幾つかの失敗も仕出しましたが、二度とその失敗は繰返さないように心に期し精進をして来たものである。

昨今、公務員にも週休二日制が実現しようとしている、その是否は解らないが、現に年休も制度化されているうえに休みを頂くほど恵まれた世の中とも思われない。

勤続三十年、働きつづけて来ましたが、漸く管理者として登用されましたが、これを機に残された十年間を住民への奉仕者として働き、より良いその日にしたい心境です。

会社員

竹内翁童

採用通知当然の顔で受け取られ

残業の一人へ守衛気をつかい

云わすだけ云わして左遷内示する

賞与というムチで半年走らされ

朝風呂をたてて日曜みち足りる

学校を出て配属されたのが紡績会社の人事課であった。翌日鹿児島へと出張命令。中学卒業の女の子の引卒である。夜旅館で父兄、先生、職安と三者から大歓迎を受けた。

当時は企業も少なく、就職難の時代だったが、その翌年から中四国、九州の山村を連日求人行脚。転職してからも求人求人、の明け暮れが続いた。が勤務屋はやはり求人、で苦労しているときが楽しい。昨今のように不況で人員整理だ、レイオフだと追いまわされているといそがしいうちに何か空しさがない心境だ。孫子の代まで勤務屋はさしたくない心境だったかつての求人難がなつかしい。不況対策の実効が待たれるのである。



衣料品小売商 大路 美幸

シャッターの音高らかに進軍歌
比べられ 比べて 女に夢がある
涼しさを味方に半袖値切られる
売り出しの汗は拳で拭き切れず
よかったと 売り出し終った瞳が笑い

八月某日。晴。今日から夏物さよならセー
ル。七時起床。起き抜けに、自筆のポップ広
告を店頭に掲げ、商品を陳列。八時半支店
へ。九時支店陳列完了。もう客がぼつぼつ。
午前十時店内満員。熱気むんむん。更衣室の
前は列が続く。ありがたいことだ。午後二
時、客の合い間を見て交替で昼食。中間売り
上げは、上々だ。午後四時頃店内ごったがえ
す。「おおきに、おおきに。」大きな身体で
狭い店内、右往左往。午後八時、家族揃っ
て夕食、午後九時支店閉店。午後十時本店閉
店。売り上げ集計。午前一時、明日の天気を
案じながら、妻就寝。午前二時、川柳を十句
余りつくって漸やく小店主の一日は終る。

大阪市交通局員 塩 満 敏

地下は客の傘から雨を知り
電熱の次は蚊取りの地下の駅
自動改札に人間様がとがめられ
機械化でふと想い出すチャップリン
七人の敵を求めて朝の駅

私の職場は「キタ」のど真中にある「地下
鉄東梅田駅」です。
十年前は市電の運転手として地上で働いて
いましたが、「市電廃止」で地下鉄勤務へ。
一日中、地上が晴やら雨やらわからない。
人目には菜に見えるかも知れませんが、一週
間に二回の泊りもある変則的な勤務で、始発
から最終まで大阪府民の足を確保するために
全力投球しています。
「乗車券自動発売機」↓「自動改札機」↓
「テープの案内」↓「のりこし自動精算機」
↓「自動集札機」と明治のママはうろうろ。
世の中の動きにめげずお客の府民は顔を上
げ職場に急ぐ。朝の駅は明るく尊さがある。



集 特 人 同

地下鉄駅員 玉置 重人

マンモスの中で歯車生きている
停止線冷たくブレーキきませる
事故の日の訓示鹿爪らしい顔
吊皮に個性が耐えているラッシュ
いつもの道いつもの時間行き帰り

復員後半年程過ぎた昭和二十五年夏から市電に乗るようになったが、時代の流れに抗しきれず、地下鉄に職場を移されてから八年が過ぎた。年中もぐらみたいに地の底でキップと定期のにらめっこ。市電時代と比べたら月とスッポン程の気楽な稼業だが、悩みは乗客とのトラブル。酔ってからむお客、横車を押す客、何べんも厭な思いをするがこれも月給のうちと割り切るようにしている。

いずれにしても私の今の人生は儲けもの人生で、零下四十度を越すシベリアでの飢えと寒さと重労働を思うと、生きて帰れただけでも幸せで、それだけにこれからの人生を大事に生きたいと思っている。

不動産賃貸業 垂井 千寿子

集金の一まわりした汗を拭く
生活の一つ一つがビルの窓
家計簿をつけて茶の間の日課すむ
気ぜわしく歩けば雲が笑ってる
仕残した事が重たい年の暮

私は以前病院生活を送り、窓から掃除婦の働いているのを見て羨ましく早く良くなつて働きたいと願った事をいつも思い出します。寡婦になるまでは、家業は手伝い程度で、平凡な主婦でしたが息子に嫁をもらい、主婦の仕事もなくなりました。会社員の息子は忙がしくて結局私が家業の経営者兼集金となりました。テクテク歩いて、暑い最中にやっと辿りつけば留守、がっかりしますが、家に閉じ籠っているよりは足も丈夫になったような気がします。こうして川柳も作り、心身共に老化を防ぎたい……。

これが私の健康法でございます。

川柳塔社
50 年度

二賞発表句会と同人総会

有信新之助

ペン
カメラ

板尾岳人

まず会場正面に▽司会 西尾 栞△開会の辞 川村好郎△▽挨拶 中島生々庵△▽議事①経過報告、②会計報告、③役員改選④本年度事業報告、⑤質疑応答△▽閉会の辞 菊沢小松園△と滋雀さんの麗筆ではり出されてある。

台風十三号の大雨も、正午前にあがり、谷町の中小企業会館五階ホールに、雲の切れ目から陽が射して、明るい同人総会となった。和気藹々も結構だが、慣れ合いにならぬように、活潑な討議を交してほしいと、川村好郎氏の開会の辞に続いて、中島生々庵主幹の簡潔な挨拶があつて、議事に入る。

生々庵主幹の経過報告の中で、日川協の事に触れ、まだ目立つほどの具体性はないが、毎月理事会が開かれて、基礎造りがなされており、将来百八十社加人を目標に、老年理事から、早く世代の交替を目指して、運動が進められていると報告された。

若本多久志氏の会計報告では同人、会員、後援者の努力により、今年度は黒字が計上で

きて、累積赤字を減らすことに成功したが、用紙代、印刷費、郵送料などの値上を控えて、まだまだ予算を許さない状態にあると、経営のきびきびさを訴え、私見としては、場合に依つては、減頁に迫られる危機にある、という示唆に対して、村田瓢太氏が質疑応答で、減頁をして柳誌の魅力を失うよりは、値上して内容の充実を図るべきだと、意見が述べられた。それに対して、減頁が雑誌運営の命取りになることをよく承知しているのと、安易にそれに踏み切るようなことはしない、と答弁が行われた。

高杉鬼遊氏より、社の運営上の役職が、一応決められて、それぞれが分担しているのだが、連絡が不十分なため、その機能が發揮されていない憾があり、責任の所在も明確でないで、その確立を急ぐべきではないか、と提案があり、理事会で具体的な方法を研究することになる。

「閉会の辞」という渾名の通り、登壇しただけでも、役目が果せる菊沢小松園氏が、驕めく会場に向つて、川柳塔の句風は、川雑以

写真右から



小浜 牧人
岩田 美代
林 瑞枝
安藤 寿美子
大林 曲手

来の伝統に立脚した川柳、明日の川柳に努力している姿がそうだ、と私見を述べ、拍手と笑声の内に散会して、地階の食堂で開かれる、懇親宴に移った。

早くから受賞者 wait していた桶に、蛍光灯が映える頃には、句会場も賑やかになり、おめでとうと、それぞれの受賞者と、祝福の挨拶が交わされる中で、六時半に兼、席題が締切られて、授賞式が始まる。

今年は二賞とも女性であり、路郎賞の林瑞枝さんの洋服姿に、川柳塔賞の安藤寿美子さんが和服姿と対比的であった。

「まるで夢のようだ」と、感想を洩らしていた御兩人が、生々庵主幹から手渡される桶の重みに、実感を噛みしめる横顔が、フラッシュに浮彫りにされている。

成果を称える桶が年々豪華になってきて、今年のはちよつと女性には、重すぎるのではないかと、冗談が主幹の口をついてでるほど、和やかな雰囲気の中に、授賞式が終り、一列に並んだ六名の受賞者の、胸に抱えられた桶に、板尾岳人氏のカメラのフラッシュがきらめいた。

遠来の出席者や、同人総会につぐ長時間の疲れを配慮してか、どの選者も枕抜きで披露が進む内に、列車の都合で中途で退席する、準優秀作二席の名古屋の大林曲手氏に、会場から大きな拍手が送られ、授賞式にふさわしい句会がスムーズに運んで、午後八時前に散会した。

瑞枝さんおめでとう

10月4日に来阪した林瑞枝さんを薫風氏と葉子さんが出迎え、薫風氏の案内で梅田トッポホット寄席で旅疲れを笑いで吹き飛ばされた。夜は富田林の方々が「むさし野」で歓迎のプレゼント。花梢、美代、維久子、岳人、薫風、葉子のみなさんが瑞枝さんを囲んで楽しいひとときをたれた。可動、葉子夫妻宅で一泊、山陰と大阪の友情は美しい。

五日二賞発表句会後、瑞枝さんの路郎賞の大桶に欠席の梅本登美也氏の記念桶が大きな荷物となった。瑞枝さんが阪急三番街の川が流れる街を見物したいとのこと、薫風氏が案内、川柳塔賞の安藤寿美子さん、戸田古

雅号ぶつちやけばなし

(144)

いわを



西 岩 雄

にし

すでに故人とはなった会社の先輩に村松夢裡・後藤青児が居た。お二人に雅号を頼んで居たが何時まで経っても埒あかず儘よ「いわを」と自分の名を用いていた。後日路郎先生に其の旨お頼みしたところ「君はそれでいいよ、それにしとき。いわを君」と鶴の一声で決ってしまった。

爾来その儘で通している。雅号らしくない雅号とは思わぬでもないが……。

一つ良いことがある。郵便が町番地ぐらい違っても誤配なく届くことである。もう一つ「いわをさん」で呼ばれる度に柳人に親しみが湧く。

日本楽器会社囃託 (七十一歳)

方、高橋古啓、河井庸佑氏に不二田がお供をする。ぼくは松江いらいのご無沙汰なので四日も歓迎陣に参加したかったが、故葉水さんの句集の校正と11月号の編集で忙殺されどうにもならなかった。梅田駅で待ち合わせの老夫君と寝台車で帰えられたが、瑞枝さんのこの二日間は大きな思い出となるだろう。――F

川柳塔社常任理事会 (10月3日)

同人総会の打ち合わせと、主幹ご夫妻の句画集が「生々楽天」とタイトルがきまる。故福井野迷路氏よし子未亡人から本社へ金一封。(林瑞枝さんも金一封寄せられた。)出席―多久志・薫風・静馬・榮・文秋・古方・生々庵・小松園・一三夫諸氏。

批判精神

人間陶冶—その展開と実践(二)

戸田古方

批判とは何が正しいかを考えることであり、反省することにもなります。つまり真実の探求法の一部なのであります。では何を、どのように考え、反省することでしょうか。考えたり、反省したりする基準となるのはいうまでもなく真実そのものですから、それは普通に考える以上に厳しいものにならねばなりません。

「何を」は自分を出発点として、自分の心とその行動はもとより、自分をとりまくあらゆる、全ての世界ということになり、どのように反省するかは、あるべき本来のもののとの距離を考え、その距離をつめることに外なりません。

路郎先生は「人間陶冶の詩」の傍書として、「人生批判」「社会批判」を据えておられますが、川柳の批判精神は日本人とともに歩んで来たものです。日本人はこの島国に移り住んで以来、絶えず、何かを、うたい続けてきました。日本のうたの原点は五七五七七を基準とする和歌であり、今日まで曲折しながらその伝統は続いています。そのもとは七五調又は五七調といわれるリズムでありましたが、これは島国を取り巻く環境に由来し、春夏秋冬を楽しむ心と

時を定めず襲ってきた天災への恐れによつて、比較的息きの短かいうたい方が生れて来たのであります。征服でなく随順です。従つて、日本人のうたの主軸は叙情、この傾向は中世へと時代が下がるほど、はつきりと現われてくるのですが、日本人のうたの原点である万葉集を見ると必ずしもそうではないのであります。そこには、知のうた、意のうたといわれるものも見つかり、人々はそうしたうたにぶつかる毎に、火焰太鼓の響に心の底から揺り動かされるような驚きを取り戻すのでした。万葉調の復活で知られる実朝の金槐集の意欲的な豪快な調子がこれを雄弁に物語つています。

反面、五七五七七の短い詩型はさらに短く、五七五と七七に分割され、付け句の形式を生んでゆきます。これが連歌、後に俳諧となつていくのです。五七五に七七を、七七に五七五を付けながら、どこまでも引つ掛かりながら伸びていくのです。心が知情意をもっている以上、知のうた、意のうたももちろん存在し得たのであります。今日の川柳と俳句はこの付け句の中から生れて来たのです。俳句は本来叙情、写実の手法の中でロマンを求めてきました。理想とは自然との合一、ロマンが求められる以上、知や意の部分も皆無ではありますまい。一方、川柳ですが、知に傾けば角が立つ、知が表面に出すぎますと、詩が失われます。川柳形成の途上、鬼子のように狂句が顔を出しました。当時の大衆は狂句に喝采をしたこともありましたが、人間再発見の時代に応じたからです。

明治も中期になって、西洋民主思想に洗礼され、俳句の刺激もあって、詩性を取り戻しながら知のうた、新しい穿ちの世界を見つけた

出すのです。川柳は情と知の接点に位置していますが、「詩は真実の探求なり」という命題を失わない限り、知に傾いたとしても、督め立ては出来ないでしよう。川柳の批判精神を日本人のうたの中に求めて、少々吟味してみなければなりません。それでは、具体的に、どう展開するのでしょうか。

真実は眼に敵しいもので、真実への認識を着実に、眼をそらさずに深めてゆくとき、常識では耐えがたいものにぶつかります。その敵しさを考えてみましょう。

自然科学の重要な方法論の形式として因果律があります。目には目を、歯には歯をとは古代アラブの掟では目が、悪いことをしたら悪い報いを受けるという勧善懲悪は至って素朴ですが、真実のルールに違いありません。例えば、

かしわ屋の女房になつた怖しさ

という川柳があります。日本人は「魚は喰われて成仏する」といいますが、土用丑に鰻の下関では河豚の供養をしています。弱肉強食を疑いもなく真実と思う反面、命を犠牲にしなければ命を保てないことに對する抵抗を感じているのも事実です。鰻や河豚の供養をせずにはあらぬ人々の気持がわかるような気もするではありませんか。これは命を保つために命を損う恐れだけではありません。意識的又は無意識のうちに、自分の囲りを時処を問わず、如何に汚染したり、傷つけ通したりしてはいないか。ものを得、目的を達した奢りや誇りの私の声の中に、又、ものを失い、跪き、嘆き、苦しみ叫ぶその中に多くの被害者を作つてはいないだろうか。生きることに忙しか、そんなことまで考える余裕なんかあるものかというのが、大方の

人々でしようが、ふと立ち止って、胸に手をおいて考えたら、それは恐怖ぐらいでは表現できない恐ろしいことなのです。それは真実を発見した恐ろしさです。

この恐ろしさが分らない間は、いつまでたっても幸福には近づけないのです。いやむしろ、幸福を求めながら、いつも幸福に背をむけているのです。太陽に向って歩めば、陰は自然とあとについてきますが、幸福の影だけを向けて、之を追いかけて、幸福の影だけを向くばなしにしている限り、永遠に幸福は掴めないと覚悟せねばなりません。悲しみあるものは幸せなりとも申しませんが、人間の苦しみは幸いにも少しでも味わった人々にはこれが分るのでもしょうが、過保護に甘えてはいる、奢りと誇りに目がくらんで、守られていることさえ幸福とは思わず、何もかもが当り前、あれが足らん、これが足らんと不足ばかりいって、いつも足ることを知らず、しかも暖まる湯の心地よさに酔いながら幸福の本質を知らないのです。批判精神の中で一番大切なのはこれを知ることなのです。

出合いさまでさ

亜訛の譚言（其三）

藤村青一

年に一度の出合いを俗に七夕さんというらしいが、今年の七月七日の本社の路郎忌句会には是非共出席したいと念願して、その思い

がかなってうれしかった。わたしの親父から神式に改式されて以来、わたしはそれを忠実にまもって、昨年の亡父の十五年、亡母の二十年祭にあたる記念祭を奉行し、今年の六月三十日は亡兄の十年祭でもあり、したので、お盆月を無視してはやばやと奉行した。その十年前といえは、亡兄のあと七日遅れて路郎氏は逝去し、その両方の葬儀に立ち合った人の言では、同じ瓜破靈園の同じ焼場の同じ釜であったという。これも一種の出合いとか、因縁というか浅からぬものを覚え且、わたしにとっては師の十周年忌と心秘かにきめて出席したものである。四十年という年は、わたしの完全失明一年目で、絶望の境地にあり、昨今のような身障者年金にもありつけず、現妻が働いて、その日暮らしだけでやっとなと生計をたもっていた状況では、到底尾道から葬儀に参列するどころではなかった。わたしは、その時折の故人になつた先輩、知己へ一生に一度の不義理を詫いで、朝夕のみたまを拝んでいる。今年の路郎忌はそれ故に、わたしにとっては特別の本社句会であった。

路郎物語の東野大八氏がかく親しく声をかけられ、なにげなく握手をしたがあとになってハッと気付き、ころないわたりが悔まれた。なぜなら障者の箇所は違っていたが、自由な身障者であった事を忘れていたのが、うかつだったからである。大八氏と直接言葉とを交し、事実上初めての出合いといってもよいが、これは二十何年「川柳」誌上で、互いのペンネームだけの出合いでも、きのうきょうの飲み友達のような気安さで話せなかつたのは何故だろう。路郎氏が「亜訛君 君と馬があうと思うが、満洲浪人で新聞記者をしてる愉快な男を紹介するよ」と終戦直後に言

った事を憶いだす。その人とは、東野大八を路郎氏の意中にもって、わたしに語つたに相違ない。大阪に居れば月に一度の本社句会には、と思つてわたし自身ではどうにもならず、年に一度の路郎忌句会に出ただけで、平素の非礼を許して頂こう。そういえば大八氏の七夕さんと断つていたように思う。生々庵氏とも握手した温もりを大切にしたい。その他わたし同様七十年前の柳友よ。次の出合いがいつになるか。当日声をかけて下さった方。握手された方。それから遠く見守って、亜訛の健在をひそかに祝福してくれている方々を含めて、では今度の出合いをたのしみに。シー、アゲイン。

塩満敏さんの幸運

児島与呂志

塩満敏さんが「川柳雑誌」の創刊号から全部上本町の古本屋から入手された。どうやら故橋本緑南先生のものらしいが、同じ路郎先生の流れをくむ者の手にはいってこそなんという幸運であろう。おかげで私もときどき拝借して読ませてもらっている。

敏さんはいま「川柳大阪」の編集人で、私は前編集人だった。編集する者にこのような貴重な「川柳雑誌」が座右にあることは大きな強みである。敏さんの家は「川柳雑誌図書館」となったわけである。

▼12月の本社句会は8日です。お間違いのないようご記憶ください。
— 句会部

紅葉

藤岡花梢選

時ならぬ紅葉でうずまる無人駅
ポスターの紅葉に染まる旅日記
夕映えへ紅葉したたる艶を見せ
一本の紅葉に染まるマイホーム
廃止線こらは紅葉の名所なり
酔いざめが寒さに震う紅葉山
祖谷谷の紅葉の中のかずら橋
紅葉のさだめ吹きだまり思う
全山の紅葉見る人のない孤島
日本の山は紅葉の晴着きる
紅葉を誘ってくるコマージュル
和え物に紅葉一枚秋にする
景勝地紅葉へバスは七曲り
天高く紅葉温泉の町を染め
災害の視察へ紅葉きれいすぎ
散っていく紅葉に注ぐ詩人の目
三尺の紅葉わが家へ秋運ぶ
スタンブも赤く紅葉の観光地
名画家も十和田の紅葉に筆を投げ
紅葉燃え恋の終りの虫の声
キャンパスの絵筆に紅葉素直なり
紅葉する日焼けの肌のさめる頃
落ち葉焚く頬にもみじの色が映え

軒太楼 里風 曉明 優美也 登花 松郎 千翁 翁敏 重人 弘生 代仕男 芳仙 可住 七面山 漫柳 木魚 昭治 隆子 祥月 度のる

悶えてる色で紅葉は雨に濡れ
紅葉色づく観光地稼ぐブラン
素晴らしい紅葉に早い日のかげり
脇役として紅葉黄でいる
病床の窓へ紅葉の秋を知り
京染めの紅葉の柄で秋を着る
霧這うて紅葉の谿が神秘めく
大山の全景紅葉にすいこまれ
紅葉もう真夏の夢を捨てきつて

佳

本蔭棒 季賛 魚山 白水 晩風 春日 千世子 静枝 凡九郎

古戦場敗者のための紅葉舞う
空き街の音が紅葉にこだまする
豊作の秋を紅葉へ誘い合い
全山の紅葉レンズも朱に染まる
燃えるだけ燃えて紅葉散り急ぎ
人

武雄 無人 悠泉 秀峰 芳子 一風

萬紅葉古城は風の音ばかり
地
紅葉の道が慕情に火をつける
天
羨やまし鹿は錦の褥に寝
軸

静花 右近

紅葉に炎える心を結びつけ

夜

柳楽鶴丸選

あの夜がいまだにつづいている波紋
甫久路

借金の子には夜も昼もなし
足音に追われて急ぐ夜の底
せめて夜ロングスカート引きずつて
地の果てへ夜を沈めて来た男
ドブ川が百万ドルになる夜景
観光のしおりに乗っている夜景
夜のネオン女は女の染まる色
秋の夜の酒牧水の心知る色
精いっぱい働き夜の酒旨し
長い夜を喜ぶ母の手の内職
手をつなぐ二人に闇の夜はない
傷心の夜道に遠く流れ星
いい話とびこみ明る夜となる
ひさびさを酌めば短い秋の夜
夜を出る女の過去は秘めたまま
夜の精になるアイラン引き直し
アイシヤドウ毒蛾となって夜に挑む
夜はよし女の齢がわからない
幽霊へ自動で働く夜のときり
告白をした夜の月は美しい
紫蘇の香の仄かに夜の手に匂う
紫に落ちぬ事あり夜の流れ星
停電でヒョコッとお月さんと会い
嘘一つ夜の布団が重くなる
気の弱い女に戻す夜の雨
信じきる妻のいびきを聞く夜更け
子の布団抑えて坐る夜勤明け
夜の幕下りて諸悪の世を隠す
忍び寄る夜風が夢を盗み去り
溶け込んだ夜の深さに酒をくむ
真夜中の都会うごめく音がする

木魚 度代仕男 ひとり 風 魚山 凡九郎 春日 道子 芳仙 重人 好一 静泉 芳子 洛醉 宵明 みのる 敏生 弘太楼 露杖 弘生 里風 白生 隆子 弘朗 絃子 右近 甫久路 肖二

初歩教室

題「洗」

本田恵二朗

故路郎先生が残された川柳への数々の名言を折にふれて反芻することによって、私は原点に戻つた心境になり、作句への新しい榮養とすることになっているが、その名言の一つに次のことがあるのを皆んなで再確認をしたいと思う。即ち『句は作家の心である。十七文字は作家の姿である。リズムは作家の呼吸である』と言われている。つまり句は、心と姿とリズムの三拍子が揃つてこそ佳句となるという意味である。そこで我々作家は、生んだ句がこの三拍子に叶っているかと反省してみなくてはならない。生んだ句を旅立たせる前に、この名言に照し合せてみることを忘れてはならぬ。自選をする時、将又選者として選する時に用いてもよい名言である。特に当教室の仲間達には心に銘記して欲しい。

滝飛沐浴びて心の汗洗う
(滝しぶきに心の汗を洗われる)

露 杖

(心労を洗うてくれる滝しぶき)
古傷を洗うすべなき岸にたつ
(古傷をここで洗えと岩清水)
洗いのやめてドラマへ手を拭う
(洗濯の手をぬぐわせたメロドラマ)
洗濯の仕方も習つて赴任する
(洗濯機の操作も習うて赴任する)
洗脳をせよと不況の荒れくるう
(洗脳をしないと不況に囁かれ)
気分を変えよう失意の髪洗う
洗濯機も辞退するよなユニホーム
(洗濯機もサジを投げてるユニホーム)
洗濯機をあきれさせてるユニホーム)
ハンカチを洗つてから恋がめばえ
(ハンカチを洗つてあげるうぶな恋)
白いもの白く洗つて嫁きおくれ
老眼と知らず洗眼くつかえし
(老眼がきたとも知らず目を洗い)
(老眼と知らぬが仏目を洗い)
岩の角まるく波に洗われる
(荒波に洗われこころ円くなり)
(荒波に心洗われ磨かれる)
足洗うところへ過去が追いかける
(足洗う心へ過去がつきまとい)
今日も無事汗とはこりのシャツ洗う
(汗のシャツ洗い悔いなく今日終る)
台風一過洗われた空に昼の月
(台風一過洗われた空に昼の月)
新春の洗濯物を妬けて見る
(新婚の洗濯物が妬かれてる)
(洗濯物までも妬かれて新世帯)

同 天人 翁 童 幸 同 度 同 日日子 同 猿 同 人 多 平 無

めしよりも洗濯好きな僕の妻
(洗濯がめしより好きならしい妻)
(洗濯の好きな妻ですもう脱がせ)
料理下手掃除洗濯に精を出す
(料理は下手くそ掃除洗濯はお上手)
(料理は苦手掃除洗濯は堂に入り)
(料理下手掃除洗濯天才的)
背信へ口惜し涙で眼を洗い
(裏切りへくやし涙で目を洗い)
風と陽と洗濯物のハーモニー
夕立によこれた木々も洗われる
(夕立に洗われ草木笑いだし)
(夕立に洗うてもうた木の実顔)
洗うほどきれいに冴える白木綿
(洗うほど冴える木綿のようなひと)
平凡な女に戻る洗い髪
わが心洗い清めたい時もある

昭 治 貞 祐 健 二 同 繁 子 同 ますえ 同 ね

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

(生きる道こころを洗う暇もなく)
 慕洗う平素の疎遠わびながら
 (墓石を洗えばしばらくねと言われ)
 (慕洗うところは疎遠をわびている)
 主婦の重荷洗濯機に助けられ
 (洗濯機主婦の座すこし軽うする)
 手を洗って来たとお三時の催促
 (ちゃんと手を洗ったよとおやつねだるなり)
 筆硯洗うておさめる大晦日
 (筆硯を洗うて除夜の鐘を聞く)
 猫をひきあいに出される子の洗顔
 (ホラごらん猫だつて顔を洗つてるよ)
 過去のすべ洗い流して今を生く
 (過去のシミ洗い流してあすへ生き)
 洗髪俵つかまんとするように
 (俵せをつかみとりたい髪洗う)
 洗顔の女の顔はゆで卵

同 秀村 三十四 正則 洋子 藤持 静子 文子

(メーキャップ洗いおとせばゆで卵)
 今日も洗濯あすも洗濯この暑さ
 (洗濯にあけくれ残暑の長いこと)
 わが心洗い清めて神詣で
 (玉砂利の音にこころを洗われる)
 説法に不信の心洗われる
 (老僧と対座こころを洗われる)
 皿洗う音が昂ぶり知っている
 洗い場の隅から小さな秋の声
 身も心も洗うて人妻の色気
 洗礼の水飲ひの譜をつくる
 古稀の母下着は妻に洗わせず
 芽出度い日料理屋ほどの洗いの
 秋風へパリッと乾いた洗いの
 マイカーをゆっくり洗う月の末
 嘘一つ重ねた夜の手を洗う
 浮世から私に戻る顔洗う

つた 同 道子 同 紀美代 静観堂 伊津志 利美 同 妙子 同 史子 同

一分間の柳論

遠山可住

三味も琴もバイオリンも一本の弦では音楽にならない。弦は一本一本の命を持ちながらそれぞれ独自に空気を振動させながら一つの調和となりリズムとなつて音律を構成する。
 川柳にはいろいろ流派があつてそれぞれに句風、句調がある。それらを楽器の弦とみるならばみなそれぞれに一本の音律を持ちながら「川柳」という音楽を奏でる楽器の種類と言えよう。作家は自己を表現するに最もふさわしい種類を選択するが、その選択は個人の

好みになかすはかはない。わかる句、わからぬ句は自分の好み、感覚、経験などの差違であつて決して一人よがりの判断は許されないであらう。
 最も性に合う種類で人智を極めることこそ大切で、いろいろの弦があればある程その妙音は尽きない深さとなるだろう。「川柳」この途方もない広さと深さを、限りなく愛するもの、そこに文化が生れ、そこに人間がいる。人間の心がある。

——ちよつと一言——
 何句送ればよいかとの問いに答えます。特に句数にこだわりますが、五句位がよいと思います。二、三句では作家の力量や進歩や個性を計りにくいと思います。尚節約は美德の時代ですので、封書を止めて、葉書にしようではありませんか。皆さんの増々健康を祈っております。

題——十一月二十日締切(一月号発表)
 宛先 岡山県倉敷市下津井一八九三四
 本田恵二朗

保夫 同 絃 同 慶彦 同 道夫 同 静枝 同 大岳 同 同 同 静泉 同 頼次 同

「ほとぼり」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 四百五十五句
入選 七十三句

ほとぼりをさますに話題変えてみる
東大阪 美子

七十五日待つ気ほとぼり大事がり
羽曳野 信子

ほとぼりのあるうち意見も馬耳東風
大阪 頂留子

失恋のほとぼり抱いたまま嫁ぎ
藤井寺 吸江

押しころすほとぼり震えている受話器
堺 ひろ子

前向きに生きほとぼりへ振り向かず
笠岡 古魔

ほとぼりはさめても心に残る傷
米子 竹馬

ほとぼりに酔う間は鼓動とめておき
八尾 弥生

ほとぼりを打消す札束積んでいる
富田林 維久子

背信を責めるほとぼりまだ残り
和歌山 小茂津

ほとぼりが冷めてニュースは小さくなり
西宮 百酒

ほとぼりをまたむし返す週刊誌
西宮 百酒

ほとぼりがさめて見直す妻のよさ
和歌山 与史

ほとぼりは冷めたが妻が戻らない
倉敷 素身郎

ほとぼりがさめたポスト知って
堺 緑水

再会の握手ほとぼり温め合う
八尾 美幸

ほとぼりも消えて身近かな人となり
兵庫 可住

握手した手がほとぼりとなって燃え
津和野 逢春

ほとぼりどころかも執念になる
大阪 凡九郎

ほとぼりを消す気の酒に酔い切れず
東予 悠泉

骨拾うほとぼり母の温みとも
神戸 どんたく

ほとぼりを消さず男の意地守る
西宮 多久志

ほとぼりがさめるとあばたに見えはじめ
寝屋川 度

ほとぼりがさめてなんでもない二人
尼崎 利美

気の変らぬ内にと廻る奉賀帳
大阪 柳宏子

七十五日待たず失敗また重ね
今治 宵明

ほとぼりの灰を他人は掻きまぜる
今治 宵明

ほとぼりをいやす故郷にある緑
今治 有里

ほとぼりがさめて仰げは空着し
大坂 好一

ほとぼりをさます孤独の旅にいる
堺 一二三

落ちてなお過去のほとぼり抱く女
堺 一二三

ほとぼりをあため合うて喜寿の坂
堺 一二三

三億円ほとぼりさめて使う気か
和歌山 福水

ほとぼりもさめて別れがあるばかり
和歌山 福水

ほとぼりがさめて気がつく落し穴
鳥取 豊生

退院の実感今日もたしかめる
大阪 一栄

逢うてきたほとぼり靴のリズムかな
大阪 一栄

ほとぼりを覚ます田舎に住み馴れる
大阪 一栄

忘れたい頃に憎らしい人が来る
松原 重人

ほとぼりがさめてむなしさだけ残り
松原 重人

ほとぼりを抱いて余生に張りがあり
堺 天笑

ほとぼりを大事に抱いてまた嫁かず
堺 天笑

熱いシャワーで恋の痛手を消す女
堺 天笑

ほとぼりがさめて妻の座に戻り
富田林 花梢

ほとぼりが華麗な女にさせている
富田林 花梢

カレンダーにそのほとぼりを沈ませる
富田林 花梢

ほとぼりをさますに罪が深すぎる
富田林 花梢

ほとぼりをさますに世間の目がきつい
富田林 花梢

営業所

阿倍野店

堺吉店

住野店

平島店

都島店

今福店

十三店

九条店

八尾店

良いよい

月賦百貨店



丸越

credit system

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1

TEL 632-3806・3807

ほとぼりはさめたが自分の場所がない
神戸 静泉

燃えきってほとぼり冷めぬ夜が白み
神戸 静泉

本心を頼のはてりが打ち明ける
神戸 静泉

パイプを拡げほとぼり冷ます気
神戸 静泉

か 佳 句 鳥 取 露 杖 逢うてきたほとばり雨の音といる

ほとばりへ期待含みもある別れ 和歌山 与 史 天ノ句 富田林 美代 八 美子 多志

ほとばりを落すに惜しい化粧拭く 一二三 親善の握手ほとばり消えぬまま 一〇 利美 小路 美子

ほとばりがさめれば政治は知らぬ 和歌山 幸 選者 吟 堀 一二三 一 緑水 二 柳志 三 吸江 四 牧人 五 柳安子

美しいほとばりがある小引出し 富田林 美代 昭和五十年 度 ベストテン (九月現在) 一六 柳安子 一七 天笑 一八 翁水 一九 静童 二〇 宵明

ほとばりがさめて大物帰国する 奈良 本蔭 棒 二四〇 堀 二五 富田林 二六 兵庫 二七 大阪 二八 尾 二九 尾 三〇 尾

ほとばりを待ち忠告の語がまるい 羽曳野 信子 一四 五 八 尾 一一 二 二 宵明 一三 五 五 富田林 一四 五 五 富田林 一五 五 五 富田林 一六 五 五 富田林 一七 五 五 富田林 一八 五 五 富田林 一九 五 五 富田林 二〇 五 五 富田林 二一 五 五 富田林 二二 五 五 富田林 二三 五 五 富田林 二四 五 五 富田林 二五 五 五 富田林

地ノ句 五 五 五 富田林 二六 五 五 富田林 二七 五 五 富田林 二八 五 五 富田林 二九 五 五 富田林 三〇 五 五 富田林 三十一 五 五 富田林 三十二 五 五 富田林 三十三 五 五 富田林 三十四 五 五 富田林 三十五 五 五 富田林 三六 五 五 富田林 三七 五 五 富田林 三八 五 五 富田林 三九 五 五 富田林 四〇 五 五 富田林 四一 五 五 富田林 四二 五 五 富田林 四三 五 五 富田林 四四 五 五 富田林 四五 五 五 富田林 四六 五 五 富田林 四七 五 五 富田林 四八 五 五 富田林 四九 五 五 富田林 五〇 五 五 富田林 五一 五 五 富田林 五二 五 五 富田林 五三 五 五 富田林 五四 五 五 富田林 五五 五 五 富田林 五六 五 五 富田林 五七 五 五 富田林 五八 五 五 富田林 五九 五 五 富田林 六〇 五 五 富田林 六一 五 五 富田林 六二 五 五 富田林 六三 五 五 富田林 六四 五 五 富田林 六五 五 五 富田林 六六 五 五 富田林 六七 五 五 富田林 六八 五 五 富田林 六九 五 五 富田林 七〇 五 五 富田林 七一 五 五 富田林 七二 五 五 富田林 七三 五 五 富田林 七四 五 五 富田林 七五 五 五 富田林 七六 五 五 富田林 七七 五 五 富田林 七八 五 五 富田林 七九 五 五 富田林 八〇 五 五 富田林 八一 五 五 富田林 八二 五 五 富田林 八三 五 五 富田林 八四 五 五 富田林 八五 五 五 富田林 八六 五 五 富田林 八七 五 五 富田林 八八 五 五 富田林 八九 五 五 富田林 九〇 五 五 富田林 九一 五 五 富田林 九二 五 五 富田林 九三 五 五 富田林 九四 五 五 富田林 九五 五 五 富田林 九六 五 五 富田林 九七 五 五 富田林 九八 五 五 富田林 九九 五 五 富田林 一〇〇 五 五 富田林

読売新聞夕刊から

(50年9月17日付)

川柳塔 九月号から

原田一風の

「賑やかに百姓一揆バスで発ち」

「養老院ベッドを下りぬ人ばかり」

は現代の世相を写し出すとともに風刺がきいている。

「正直な顔に『米価』のハチマキし」

工藤 甲吉

「田中さんに似たタレントも共に消え」

不二田 一三夫

はおもしろい。若柳潮花は

「作者は句会においても選者当て込みの句は作らず、入選を気にせず、自分の個性のある句を作るべきである。句会の席でまた誌上で入選句の多いことはうれしに違いない。しかしその句が自分らしくない句であれば成功とはいえない」と述べている。(正)

日川協コーナー

▼日本川柳協会50年度総会が12月7日正午から京都市「かんばる京都」で開催。総会議事は経過報告、会計報告、意見対話その他
▼参加資格は日川協加盟社(会)の所属員。

参加会費は五千円(一人)申込締切11月5日
— 申込後取消しの場合11月20日以後は返金しません。

▼9月13日に月例常任理事会が東京都台東区蔵前、竜安寺川柳会館で開催。新入会者が多数、5時から駒形の「どじょう」で懇親宴が開かれ盛会。本社から中島生々庵主幹出席。

▼530大阪市北区宗是町一、大ビル6081片山法律事務所内(日川協) 電話06・441・0547。
★

▼また年賀広告でお世話になりますが、よろしくお願ひ申しあげます。

(川柳塔社運営委員)

昭和五十年 度最終回

「拍手」 五句以内

締切 十一月二十五日

昭和五十一年度 第一回

「酔う」 五句以内

締切 十二月二十五日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七

藤井一二三方

大萬川柳係

柳界展望

(原稿締切毎月末)

初めて味わう方のため」の

一文がある。好著惜しむらく奥付けがない。

▼豊岡川柳天守閣10周年・川柳おとひめ3周年記念句会は11月16日1時から豊岡市瀬戸、瀬戸公民館で開催。宿題―好き・レジャー・無口・習慣・まあまあ・漁港・銅像・十・時事雑詠。会費三百円(呈、発表誌)宿泊申し込みなど、発行所守口市豊秀町一の一五七〇久保田以兆方川柳天守閣。

▼中島生々庵主幹は11月3日の「昭和50年度文化祭川柳大会―第10回川柳文化賞贈呈式」で、第一部(出席者)の「再会」の選をされる。(9月号参照)主幹ご夫妻の句画集「生々楽天」は来春三月発刊が本極りとなる。(日川協の常任理事会で東京出席は本誌参照)

▼49年度4回「北上」年間優秀作品がきまる。一問いつめて人の哀れに突き当り・神手津王作―次点は―手を汚すことをためろう人ばかり・田中士郎作。

▼的場泉月著「雑俳泉月句集・つくばい」に「雑俳を

人編集所・三室天翠宛。

▼小泉戸牟氏(西日本新聞社)と池口香歩氏(国会図書館)から―葎乃書簡から与謝野晶子の歌につながるあたり大八氏ならではの筆力に唸られました。葎乃書簡、なかなかの名文だと思えます。

▼富士野鞍馬氏(東京都)は、きもの学院できもの講演を二時間されたそうでお元氣をよろこび申します。

▼備北新聞9月5日付に「僕らの先輩と知己」を仲田多香史氏がペンを執っている。高鷲亜鈍氏(藤村青一)の「詩川柳考」や、路郎先生の青年時代が出てくる。仲田氏は亜鈍氏や大坂形水氏らとは青年時代からの親友だそうである。本誌

07東京都港区赤坂七の六の三―柳樟寺川柳会・川柳号紹介している。

河野春三編集

「風」

季刊 7号

洗練された編集はさすが。詩・句・文も快調。「埋没的な詩の紹介(5)」寺島珠雄が藤村青一(高鷲亜鈍)の「詩川柳考」を紹介している。発行所〒569高槻市竹の内町二二の一―河野方風発行所

▼田中好啓氏(倉敷市)から―西日本川柳大会の帰途、美しい男でした。私は血圧、蕨風、岳人、冬二、千尋諸氏が倉敷へ足を伸ばしてくれました。久しぶりにジャン柳論の花を咲かせました。

▼市岡晚舟氏(ハワイ)から―幹事の林蒼蛇楼氏が最健康を害されたので、当分の間ウィロー社の幹事をすることになりました。

▼若柳潮花氏(高槻市)から―水客君は定退、紫香君も新阪急ホテルの女子寮をやめました。彼は阪急に務中村氏である。盛会。

▼森井善居氏（竹原市）は8月30日付で保険課に配置替えとなり9月5日主任発令を受けられたが同じ職場に小島蘭幸氏もおられるそうである。

問され形水氏、一三夫氏、葉子さんと歓談。

▼故永尾英断氏の追悼川柳大会報が大鉄川柳会から発行された。追悼文を保西岳詩、宮口笛生、山内静水、辻白溪子諸氏が書いておられる。大会の兼題の選を阿万万的、正本水両氏が担当された。

▼川柳大阪支部「川柳東風」で8月26日から29日まで地下鉄東梅田駅厚生室で川柳展が開かれ盛会だった。

▼児島与呂志氏（藤井寺市）が「酒」につづいて「川柳壇の異色、薰風選でおなじみ」の電波新聞へ「昔なつかし」と題して、まだ誰も書いていない映画界の昔ばなしを執筆。また氏が映画のニューフェイスとして入社したことを訪

▼小林孤呂二氏（松江市）は市の仕事で神戸出張、その寸暇を利用して本社を訪

▼不二田一三夫氏は新聞柳壇の異色、薰風選でおなじみ

▼越智一水氏（今治市）第17回全国郵政川柳大会に参加、今年からまた理事に選出されました。松江の恒松

町紅氏と同宿でした。青竜刀、茶六、瓢箪坊、剣人諸氏が選者で盛会。東京の不況は嘘かアドバルーン一水

▼富柳会から林瑞枝さんの歓迎宴出席者の寄せ書拝受。

▼宮口笛生氏から第19回鳥取大会（全国鉄川柳人連盟）の寄せ書拝受。

▼南柳・摩太郎・小松園推薦

溝口 はやお

新同人紹介

これらも「川柳寄席」へ収録されると。

▽旅 信△

▼北陸小松川柳大会に出席

栗津温泉から、好郎・牧人

・ペ女・雀踊子・柳志・凡

九郎・多久志・喜風・思月

諸氏の寄せ書拝受。

▼若本多久志氏（西宮市）から金沢で義母の法要をすませ、一路北陸道を北し

黒部宇奈月につきました。一すすきの穂ゆれて越路は秋を告げ—多久志。

▼越智一水氏（今治市）第17回全国郵政川柳大会に参加、今年からまた理事に選出されました。松江の恒松

町紅氏と同宿でした。青竜刀、茶六、瓢箪坊、剣人諸氏が選者で盛会。東京の不況は嘘かアドバルーン一水

▼富柳会から林瑞枝さんの歓迎宴出席者の寄せ書拝受。

▼宮口笛生氏から第19回鳥取大会（全国鉄川柳人連盟）の寄せ書拝受。

▼南柳・摩太郎・小松園推薦

溝口 はやお

新同人紹介

▽11月の句会△

▼菜の花句会—10日6時から—題—落書・見積・情・

騒ぐ・会場は西郷会館2F和室。投句先は大路美幸宛

▼堺・若菜合同句会—13日6時から—題—ゆれる・白

を出品、特に人物画好評。

新常任理事紹介

岩 本 雀 踊 子

（桜井市）

▼宮口笛生氏から第19回鳥取大会（全国鉄川柳人連盟）の寄せ書拝受。

▼南柳・摩太郎・小松園推薦

溝口 はやお

新同人紹介

▽11月の句会△

▼菜の花句会—10日6時から—題—落書・見積・情・

騒ぐ・会場は西郷会館2F和室。投句先は大路美幸宛

▼堺・若菜合同句会—13日6時から—題—ゆれる・白

を出品、特に人物画好評。

▼宮口笛生氏から第19回鳥取大会（全国鉄川柳人連盟）の寄せ書拝受。

▼南柳・摩太郎・小松園推薦

溝口 はやお

新同人紹介

▽11月の句会△

▼菜の花句会—10日6時から—題—落書・見積・情・

騒ぐ・会場は西郷会館2F和室。投句先は大路美幸宛

▼堺・若菜合同句会—13日6時から—題—ゆれる・白

を出品、特に人物画好評。



牧人・瑞枝・美代氏の笑顔

分・秋晴れ・人形—会場は八木摩太郎居。

▼南海川柳会—20日6時から—題—接待・善後策・先入観—会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会—20日6時から—題—風潮・逆・ふける・シリーズ。会場は松崎町三丁目大萬。

▼川柳東大阪—23日6時から—題—偶然・特効薬・姤く・タイミング。会場は東大阪市中央公民館二階第二集会室。

▼仲どんたく氏（神戸市）は10月13日、19日心斎橋カワチ画廊の青樹社展に七作

を出品、特に人物画好評。

▼堺・若菜合同句会—13日6時から—題—ゆれる・白

を出品、特に人物画好評。

▼宮口笛生氏から第19回鳥取大会（全国鉄川柳人連盟）の寄せ書拝受。

▼南柳・摩太郎・小松園推薦

溝口 はやお

新同人紹介

▽11月の句会△

▼菜の花句会—10日6時から—題—落書・見積・情・

騒ぐ・会場は西郷会館2F和室。投句先は大路美幸宛

▼堺・若菜合同句会—13日6時から—題—ゆれる・白

を出品、特に人物画好評。

▼宮口笛生氏から第19回鳥取大会（全国鉄川柳人連盟）の寄せ書拝受。

▼南柳・摩太郎・小松園推薦



林 瑞枝・岩田 美代・小浜 牧人
安藤寿美子・梅本登美也・大林曲ん手
会場―大阪府中小企業文化会館

一三夫・牧人・右近・太茂津・新之助・百酒
 ・滋雀・喜風・好郎・星斗・弘生・美幸・莫
 いき・雀踊子・凡九郎・岳人・敏・緑水・葛
 城・漫柳・いわを・喜美子・ゞ女・亜成・恒
 明・一舟・形水・正彰・三十四・作二郎・曲
 ん手・古方・幸生・小松園・静馬・多久志・

一舟選

酒ぐせが左遷の中であぐみんなく
酒ぐせを長女にまかしみんなど
酒ぐせはなきて人柄憎んでく
酒ぐせへ逃げる支度が酌きにく
酒ぐせが可愛い女にさせている
もつともな理論飛び出すコップ酒
酒ぐせを惜しめだけのまゝ終る
酒ぐせの釣銭だけは勘定し
酒ぐせへ母ハイハイと五十年
喧嘩酒幹事はらはらするばかり
酒ぐせに心の底をのぞかれる
酒のめば陽気な夫でつがなし
酒ぐせを教えてくれた女も老い
高い酒飲んで泣き出す悪いくせ
酒ぐせを幹事は妻に囁かれ
二次会へ来て泣き酒は放つとかれ

柳宏子
弘生
維久子
花梢
瑞枝
静歩
千万里
柳秋志
花梢
喜美子
滋賀
あき
喜風
牧人

小川 恒明選

控えの弟子が名前を忘れられ
弟子の国から来た弟子に冬に
弟子入りをして奥さんの氣に
愛弟子と越えてはならぬ線を引き
大学教授が弟子に
弟子だけで来る日の墓は賑わしい
弟子として年輪たのら座りだこ
詳しくは弟子が知つたた勞基法
趣味の道知らず知らず師弟め
女弟子煙草が好きになれませぬ
不平不満胸にたんで弟子修業
師をしのぐ見識を持つ弟子もよし
大成を期す新弟子の腫がきれいに
偉すぎて弟子も居付かぬ人になり
弟子一人もたす国宝朽ちてゆく
よく出来る弟子はささやとなり
女弟子夫婦ゲンカの種となつて
下手くさが弟子や弟子やと言ひふらし

儀新之助 一 いわを 滋三雀 一曲手 生々庵 武雄 鶴声 作二郎 好遊 鬼宏子 柳宏志 柳宏志 多松園 小松園 静馬 一花舟

快晴の先取りに似た日がつづく
 先取り点挙げたチームの底力
 先取りの奨学金に職が無く
 先取りが三月となつて披露の宴
 人生を先取りしてゐる幼な妻
 先取りの利子にまんとひつかかり
 先取りがお徳と商魂そつがな
 先取りも結局ベアの内となり
 同権の先取りウー・マンリブ強し
 先取りの知恵貸す程に子が育ち
 先取りはせずグーイング・マイウエイ
 先取りをしした妊娠へ式を挙げ
 まぼろしを賣うて先取りするつもり
 先取りへいつか元も子も無くし
 先取りのうまい話に縛られる
 先取りがなんと洪楠ばかりなり
 冷静になつて先取りした誤算
 先取りの愛に女は賭けてみる

夕花
 千子庵
 生々庵
 柳宏子
 柳安子
 天笑
 柳志
 漫笑
 一三夫
 藤持
 芳生
 登美山
 柳信
 どんたく
 柳信
 優福
 日満
 水

川村 好郎選

公園を斜めにぬける早出番
金のない土の感觸ふみにくる
公園に士のおふみにくる
公園の憩い働き蜂の昼
公園の陽だまりぐちを捨てにくる
試歩の日の公園みどりがこぼれそう
再会の公園互いの距離を知る
公園を庭園がわりのとこに住み
公園の隅で犬の子が生まれ
公園へ回り道さす藤の花
公園の自由取り合う草野球
デートした公園今日は子と遊ぶ
公園に来て男仮面見る
公園にくると故郷の風になる
公園に夜とひととの貌がある
公園の裏に易者の灯がかばそ
小公園誰が建てたか地藏尊
公園の池に旅情の雨が降る
公園の一隅デートの指定席
公園のベンチ自嘲の昼を居る

栗秋
文雀
滋雀
曲ん手
つき子
静歩
静歩
静歩
あき
花梢
智子
簌彦
千万
弥生
十止庵
花梢
醉斗
牧人
牧羊
柳宏子
栗

初心者歡迎

短期速成
費用低廉
內容充實

入會隨時

（規則書皇上）
大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
誓得寺内 関西奇術教室
電話大阪〇六四七一二八

この上でも死ねる覚悟の青畳踏まれても畳は愚痴をこぼさない蹴られても畳に耐えている畳お祝いにせき立てられる畳替えこれからも今までも畳の上で僕一人核家族郷里の畳を恋しがり美しい畳の上で終りたい女房と畳の事で相談したい六畳に五人見事に床をのべどっかりと畳に坐わりたい帰朝寝ころべば唄も出てくる青畳青畳予算に負けたカーペット借る話畳へ膝を崩さないふるさとの畳の上で死なまかな苛立つた足は畳に付つまずき蚊にくわれたとこを畳の目でこすり畳干す夫婦でうそのない生活湯体ない畳に吸わす酒でなし浸水ない急遽畳へ待たなし新築へ母の部屋だけ畳にし二つ三つ畳叩いた明治の意見美代

酔うた目に妻は孤高の人に見える
一生を版画にうずめ孤高逝く

祥正 月朗 栞選 小松園 美幸子 寿美子 新敏助 夕花人 岳雄子 武雄啓 君古花子 古夕子 維久久子 維久久子 智子梢 花梢梢 唐花梢 千万歩 静人歩 岳久笑 維天志 柳志志 葉志方 古志馬 静久志 多柳 漫柳

(河井庸佑整理)



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

菜の花句会

下町に生きたいように生き
福耳を持って不況に悩まされ
踊り娘のエネルギー老いの眼に眩し
入社して轡並べた馬となる
香典のあとから廻ってくる出産
羽根つけて今日の帽子に夢がある
エネルギー売ります只今失業中
丸木橋渡る子馬よすべるまい
生んで見せますと女に意地張られ
つけ馬は話が上手歩調合う
落武者の耳だけになる霧の夜
花道が長いと思う馬の足
角帽へすこし残してきたロマン
神さまが耳を塞いでいる願ひ
馬耳東風母は元気に花を摘む
気紛れは三月生まれの所為にして
馬車馬の仲間にはサギ師などいない
雲少し浮いて明月らしくなり
天皇の帽子に親近感がある
走れなくなる日を馬よ知ってるか

鬼遊報

紀実代
鶴声
正彰
文子
弥生
弘生
史葉
白風
誓二
鹿蔵
美幸
雀踊花
夕花
醉々
与呂志
洋子
幸生
肖二
牧人
十止庵

川柳後案

井上柳五郎報

敬遠がもう長屋じゅうかけめぐり
地元では敬遠よそでは迎えられ
敬遠をしたのに握手求められ
隅いこに敬遠されたのが座り
事故悲し冬の雪山死出の旅
馬鹿な奴つぶやきもれる事故現場
事故現場がないかと先に聞き
無事故駅育てた菊が美しい
PPMこれより有害割り切れず
割り切った思想かえてて敵つくり
肉身の事故死へ金で割り切れず
割り切れぬまま見つめる遺留品
肩書きが祝辞辞退を許さない
リボンだけ大きく小声でした祝辞
外人の祝辞満座笑いこけ
祝吟をひとつ祝辞をしめくくり
反骨の祝辞ひにくも少し入れ
花嫁が顔赤らめている祝辞

いずも川柳

板垣

草丘報

山の幸いっぱいに出荷する
子にヒント与えて智慧を確かめる
ヒントだけ教え師匠は座にもどり
駅裏の赤提灯がぼくを呼ぶ
ひらめいたヒント一気に書き上げる
別れ際一言謎が解けはじめ
これ以上言う答えになるヒント
駅伝はスターが一人生まれる日
駅員の小さな親切しめる旅
政治駅一躍悪名の名のもとに

定恵
秋月
照路
昌吾
廉
柳五郎
恒洋
胡風
照遊
楽遊
佐加恵
武士
勝友
博山
雷一
正竜
白竜
久米雄
草丘報
恵治
祥月
河南
雪美
正朗
草丘
圭詩朗
芳子
水煙

駅弁の魅力鈍行一人旅
剣の道強く修業で燃え尽く遺児
下積みで耐え抜く日目を強く生き
赤字駅アシビラ派手に貼ってある
ひとり旅幸福駅もただの駅
適当に強さ保って親父の座
人情が通う小さな駅の窓
乱歩集読んでヒントを得た殺意
膝叩きながらヒントが通じない
川柳たまししまし

稲田

足音が先に帰っているわが家
腰のばしに帰って軍歌を唄う父
北斗星別離の人の幸祈る
担ぐ荷の嘘を腰骨知っている
台風目の目にされてから孤独感
男らしく負けに行く夜の遠火火
見晴らしがよくて台風よく当り
語り合う空の青さに腰を据え
靴脱げば昼間の虚構崩れ落つ
そのチャイム親指で押す久し振り
背かれて北斗大きくのしかかる
みどり児も家に帰った眠りよう
家一つ建てて人生たそがれる
彼岸花貼れと叔母言う痛い足
夫婦です苦楽は針と糸の仲
熱烈な言葉は花の色は褪せ
堺・若芽合同句会
おじいちゃん川柳の花火買うて来て
きつと来る心にゆとりあって待ち
山の峰山の男を待っている
母性愛身こもる鳥は目をつむり

軒太楼
晴月
松秋
虎生
独仙
鐘堂
登美也
緑之助
豊作報
千翁
林鶴
筒子
八笑人
黎水
鼓草
流風
静海
豊作
里風
山桜子
朝二
鴨平
安静
武子
博子
草春報
佳子
笑痴
凡九郎

(前号参照)

丁火を金見ゆる火た消す

季和
容大

食へたし物からへてもある女の
ボカアと酔うて花火の色眺め

良子
美左衛門

灰皿とその日の横柄。くわたり

元一。

灰皿へ不利な立場をくすばらせ
灰皿へ不倫の滓が一つ落ち

この家は佳人住むらし青すだれ
はみ出したままに歩いた過去の道

半生の重荷は悴せ詰めてある
重荷皆妻にゆずってあの世行き

灰皿を持ち寄り長屋の通夜の家
婿養子暖簾の重荷へ堪えて生き

川柳大阪

竹中

嫁姑投げた波紋は孫が消し

口裏が合わねど波紋にうろたえる
反対の一言波紋よぶ会議

こつこつと貯めて屋台より買えぬ
共稼ぎホーム資金の夢をのせ

資金ぐりベタルを踏んでいる社長
アルバイト旅行資金へ低い腰

疎遠にした友へ泣きつく資金ぐり
転向を誓う涙に嘘はない

硬派から軟派へ今日の髭を剃る
下積みの長さ野望がくじけかけ

アルバムに告白の種そつと伏せ
よろめきを告白してるガラス越し

告白のムードになってきた歩幅
告白へ辻妻合わぬ点と線

くじけると父は進軍ラッパ吹く
ロビーの絨氈この家の格を敷き

ロビーのソファ僕の体が小さくなる
政治家の嘘がロビーに落ちている

南海電鉄川柳会(大阪市)辻

バラ色にする人生がむつかしい

道夫

福水

与史

晶子

太茂

千寿子

富江

万作

肖二報

喜風

凡九郎

恒明

綾女

美幸

好一

度

柳信

あいき

柳宏子

誓二

正彰

儀一

智子

肖二

雀踊子

一栄

季賀

季賀

亡き人の悌しのお覚書

へエそこが抜けてしまったが覚書

覚書二代目さんは知らぬこと

覚書声まで取ってある安堵

今日学ばメモを読んでるランドセル

日が過ぎてド忘れしてた覚書

達筆で人には読めぬ覚書

覚書頼りに道を歩かされ

恍惚の準備するの書ききたがり

税務署に取り上げられた覚書

痴話喧嘩毎に持ち出す誓約書

弱目目に覚書をばつてき出され

大阪川柳会

金井

標本は母さん男を信じまい

標本のつもの汗を見せつける

善人の手にトリックがもつれかけ

朝の陽を拝む自然の中の母

法衣の中で燃える尼僧の瞳の静か

花嫁の気持はぐれた色直し

緋の衣夢見て小僧庭をはき

衣食足る暮しで人情忘れられ

法衣身につけて邪心を抱えている

衣食足るモラルは正のころに生き

どん底の生活知ってるあたにかみ

愛しての故どん底も苦にならず

底辺を知って人間円くなる

どん底に落ちて家族の気が揃い

追いついたけどライバルと見てくれず

大物に接近法螺も仕込まれる

台風接近いつか雀もいなくなり

真砂

凡九郎

鎮彦

正彰

肖二

綾女

維久子

柳信

肖二

肖水

儀一

和郎

好一

鎮彦

滋雀

雀踊子

肖二

肖水

千子

十止庵

文秋

正彰

智子

恒明

弘生

一栄

喜風

柳宏子

にらめっこして鏡の中の美をさがす
一蓮托生そんなとこまで寄っていた
台風接近テレビは港ばかり見せ

川柳大阪 児島与呂志報

ウラシマはだまって箱をだきしめる
何の苦もないのかあいつの高いびき

ステコとシミーズおどる竿の風
京訛り衣服の似合う女将なり

京訛り加害者として立っている
飾り窓突然となる0の数

絞ったら血の出るような記事ばかり
呆然の母を抱いてるよい知らせ

前向きで意見を出せば押えられ
神主が護符売り歩く夏祭り

おみやげがひしゃげて帰る三次会
人波に駅長じつとしておれず

重人

胡蝶

喜賀

季賀

笑舟

徹子

六竜子

道子

洛水

眉介

京介

敏

一三

二

三

四

五

六

七

八

九

十

佳句地10選

(前月号から)

河原みのる選

憎めない男やっぱ頼りなし

仕舞風呂愚痴浮かべたり沈めたり

離婚する勇気あっぱれとも思い

この人に無茶をいわせるイスがある

巡礼に坂道がありありがたし

見せまいと着たよういから出る弱味

親方に手技きくことも教えられ

つまづいた石を路傍へ寄せて行く

先妻の指紋がついているノート

嘘の目をかくす団扇をもてあそぶ

富子

枝子

子

野の花を活けて飯場のワンカップ
ボンコなりやこそ嘘もデライもない僕で
下着からはみ出しそうに母の乳
日妻性無い亭主顔負けするミシン
甲の出振るレンズが写す金紋様
倦怠期子がお守りで無事に過ぎ
胎児にも護符持たせる母心

高知川柳社

川竹

松風報

仲人が色の白さをほめて去に
勝ち続く力士色艶ほめられる
七色の虹さえ冴えぬ日の落日
あじさいの青は何色待ちぼうけ
海の青空の青さも土佐の色
色話口で楽しむ年になり
道草の子供が茜色になる
どん底の生活人柄までも変え
どん底に居ても人柄争えず
一通の葉書に沁むお人柄
生前の徳会葬の列に見る
人柄と別にお金をもを言い
分校を去る人柄を子も惜み
晩年を画も人柄も丸くなり
原爆忌水の流れに霊不城
姑の機嫌は味噌汁までもほめ
飾らない言葉の奥にあるまこと
あの頃は公害もなく鳴子揺れ
二期作の稲の重みや鳴子なる

岸和田川柳会

植山

武助報

離婚沙汰世間黙って笑うだけ
被災地へつなぐ世間の手が温し
世間態へ背伸びしきった見栄を張り

操子
春光子
春榮

本蔭樺
凡九郎
雅巢
季峰
徳松
呑歩利
与呂志

言いたい事言って世間を狭く住み
不肖の子持って世間に恥じる親
地獄への特急便か暴走族
サラ金の金借りてから蟻地獄
家出の娘へ地獄の門があいてる
入道雲ムクムク己れの氣も知らず
中秋の月を走らすきれ雲

オーエスケイ川柳会

大坂

形水報

手品のように化粧品が出るかばん
白地図を塗りつぶしてゆく販売網
セーリスマン鞆の中身口で売る
満員列車かばんに座る老夫婦
負け将棋今日は歩を先に取り
企業秘密産業スパイが先取りする
屋中はやっぱりクワイラーいる残暑
地図通り歩いてみたが五分じゃない
現金をホイッとほり込む銀行の鞆
ぶらさげてきたカバンから百万円
空白を明日の地図で埋めてゆく
倒産の嵐業界の地図を変えた
先取りの付けが庶民に廻された
一夏の恋も残暑で終りけり
宿題に先生の顔が浮く残暑
残暑きびしく働き蜂の列が行く
迷走台風日本地図を串刺しに
地図持って団地の中を迷って
先取りの恋追いかけて追いかけて
残暑厳しく喪服着て出る日が続き
倒産の記事が又出ている残暑

つまらない話冷房で風邪を引き

城北朗句会
川口

弘生報

春榮

武助
千代
静芳
香珠夫
露子
加仙
からぎ

鶴を折る少女の指がすき透り
罪のない話を風に持ち去られ
貰つてからふるさとの遠くなり
暇つぶしでやった智恵の輪意地になり
怪人が出ぬもう辻褃合わしく
つまらない顔もあいに持ち合せ
使われる方が強気の旗をふり
反論の中でつまずき老を知る
妻として子に採点をされている
積立てが終った時は又足らず
晩酌の追加顔色読みながら
老人は役に立たねど罪もなし
生の声かすも良いが文恋し
過疎の村見捨てられない老夫婦
娘の秀才男なればと親は云う
平和祭ゲリラは何を考える
天気予報明日の暑さを恐わがらせ

沖繩の海で見て来た海の色
海釣りの釣れもせんの高いえさ
揚げ足を取って取られて笑い合う
揚げ足を取られ悔しさ顔に出し
揚げ足を取ろうと相手の出方待ち
苦勞人他人の飯の味を知る
一杯の酒で他人も丸くなり
追憶のこころあたりはもう他人
今日からは他人ではない二人
蒸発の母を他人だと思ふ
近い他人とおだて上げられ借りられる
割り切った元の人となる夫婦
社長秘書何かあるかと他人の眼

柳信

右近
太茂津
牧人
誓生
弘信
柳子
芳子
静歩
智子
満津子
正朗
秀村
繁つね
ますえ
三十四
春巢
南柳報
育園
南柳
規一朗
つとむ
誓二
善信
鎮彦
美代
醉々
石捨
肖二
柳信

ちよつとした事が他人でない仲に
他人なら言える言葉が出ぬ身内
負け犬になればみんなの眼が他人
今日からは他人となれる印鑑を押す
裁判所元の他人にしてみよう他人
金払えば色即是空もう他人

三井が丘川柳会

高田 博泉報

退院の別れは嬉し晴ればれと
陽を追って鉢植もうごく狭き庭
不況にも朝顔だけがのびのびと
太陽を欲張って取る設計図
太陽にはじない乾が朝を出る
僕が死に地球が死に太陽も死ぬだろう
雲上でロマンチックな陽を拝み
太陽に背を向け遊ぶ地下街
青年はぎんぎらぎんの太陽か
ええなあ今日も太陽出てくれて
太陽が遊ぶつつかたミニプール
太陽を背負うて男影つくる
一人だけまだハンカチを振る別れ
旅先でロマンチックな別れする
川の水見ながら別れ話する
そうと決まれば黙って別れる方がよい
きのうより今朝の鉢植え芽がふえて
鉢植で団地の窓に四季をおく
盆栽へ鉢の音が冴える朝
太陽に鯛一枚裏返り

和歌山七面句会

中筋 三幸報

謎だらけの宇宙に小さく生きている
浄瑠璃のファンも同じ身振りして

はやを 綾女 正彰 小路 摩太郎 小松園 公三郎 章三 吟風 世成 博泉 博泉 鬼遊 古方 水声 草生 凡九郎 男女 牧人 形水 亜鈍 清水 柳宏子 亜也子 小松園 幸治

結ばれてキャンプファイヤー尚燃える
勝名のうりうけた背中にファンの手
ファンレターの苦言を撰っている人気
三波春夫のファンで妻も年を取り
キャンプするレディファースト行き届き
テン村山百合句う其処彼処
夜のキャンプ畳の味を知らされる
ほろ酔いママがもらした過去の謎
草原のキャンプへこころぎ合奏し
物価高謎のごとくに消える金
謎残り昭和元禄終りけり
一つだけ謎があったが結婚し
謎めいた話ついに宇宙人

ハワイイロー社

市岡 建史報

有り余る知恵が邪魔して今日の位置
三億円捜査本部と知恵くらべ
生活の知恵というのか味噌の色
土壇場で知恵のないのを口惜しがり
一休の知恵橋止めの端し渡り
若様と呼ばれる人に知恵がない
横に振る知恵も覚えた孫の知恵
貸す程の知恵もないのに借りに来る
知恵足らぬ俺も健康だけは並
猿知恵は大事なことでもボロを出し
精根をこらして知恵の輪を仕上げ
局面が変わり入れ知恵ダメになり
知恵なしと口癖の夫に知恵を貸し
頼まれて知恵貸してやる纏め役
出世には太閤様の知恵が要り
金借りて来た娘に生活の知恵をつけ
もう立ってあんの出来る孫の知恵

太茂津 宏康 武雄 次 富子 寿子 凡夫 マサ子 澄子 宏幸 辰幸 三幸 秀山 山 坪山 峰円 万里歩 一つ葉 小雪山 風影 河舟 紅溪 蒼蛇楼 草海 公女 彩海 北海 快夢起 三石 雪女

知恵がありすぎ朝顔枯らしたり
知恵くらべつつまらぬことに議論する
浅知恵が又のさばってうとまれる
入れ知恵をされたか鼻息荒いこと

虹川柳俱樂部(唐津市)

新岡 回天子報

種時かぬ草の強さを憎み抜く
額血に家訓は生きて今にあり
にくい人マダムいよいよ切れぬ仲
舌打ちは憎きゴキブリ打ち損じ
ねむれない夜は悩みのまだ続く
耶馬溪の里から紅葉に是非帰れ
一カケラ此の血古代の影包み
血茶碗何かも構わぬ遊山の宴
迷文を自筆で書いた血を焼き
古伊万里の絵血が匂う違い棚
叩かれず孫にとまった蚊が憎い
サラリーは何時も米価に後手を取り
一カケラこの血古代の影包み
川柳ささやま 河原みのる報

曉舟 稠雄 エス子 カロ女 照坊 広沖 岩光 村童 春吉 新一 来山 三勇 栄一 虹汀 回天子 越山 喜美代 素水 秀峰 みのる 可住 八陣 近江 精珠 宗月 桂峰 春峰

川柳塔社同人総参加ノ（一人二句以内）

新年号を飾る「ユーモア特集」

（締切厳守・十二月二十五日着便まで）

川柳に忘れられているものはユーモアである。そのユーモア味のある川柳で新年号を飾っていただきたいのです。

年賀広告受付！

本誌六分の一段二千元です。

グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が4000円です

川柳塔社

振替口座大阪
三三五六九番

新年号発表（11月15日締切）

・ 募 集 ・
川柳塔（10句）西尾 栞 選
水煙抄（10句）菊沢小松園 選
愛染帖（3句）橘高薫風 選
課題吟（各題5句以内）

「建」 堀江 芳子 選
「発」 宮尾 あいき 選
「起」 河村 日満 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）西尾 栞 選
水煙抄（10句）菊沢小松園 選
愛染帖（3句）橘高薫風 選
課題吟（各題5句以内）

「婚」 小林 由多香 選
「寒」 波 小林 孤呂二 選
「閏」 年 浜野 奇童 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り、★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

締切はお守りください

定価三百円（送料十六円）

半年分 千八百五十円（送料八円）
一年分 三千六百円（送料一六円）

昭和五十年十月二十五日印刷
昭和五十年十一月一日発行

大阪市南区豊中二丁目二〇番地

編集者 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心 社

印刷所 郵便番号 542

大阪市南区豊中二丁目二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三三八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

・ お 願 い ・

ご送金は早目をお願いいたします。
会費が切れますと休会とみなし送本を中止することになります。

・ペンペン草・

はたらく歌

★「はたらく歌」は40年の創刊号（10月号）の翌月、つまり40年11月号から発売して本号で12氏参加、そのうち死亡、または現在用柳から離れている人が11氏、だから91氏が現役（えき）ということになる。いつか書いたように本にしたいのだが、お一人五冊でも引き受けてくださると赤字もすくなくすむが、現在の段階ではあまりのようである。せめてお一人一冊く

お役だてください

アリナミンA タケダ

効能—肉体的疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB₁補給、脚気、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。

食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。

らいになるまで待つより仕方ないように思う。

雅号ぶっちゃけ話

★「雅号ぶっちゃけ話」は40年11月号から発足した「延べ百四十余名登場（嘉数千代香さんは一四一と訂正）これと「はたらく歌」を合同してもお一人一冊引き受けていただかないと出版しにくいだらう。★余談だが、ある一流新聞で「芸名ぶっちゃけほなし」というのがその後に出た。内容はおもしろく出来ていて、芸能記者の筆おろしのコチラや旗色が悪かったがそのうちに消えてしまった。

一分間の柳論

葉子コーナー

▼11月の初め頃より初雪が降りますので、大根、牛蒡、人参等、穴を掘って、野菜を土下に置き中に上をかけてしはれるのを防ぐのです。

▼食べる分だけ雪をかきわけて野菜に手が触れた時、暖かく感じたのを感じ出します。

★ペンがここまで進むと、「一分間の柳論」も登場させないと不公平だろう。これは47年3月号が皮切りの柳論を10枚ほどお願いするとなかなか書いて貰えないが、一枚だと誰方もOKである。なかには一流紙がとりあげた佳篇がいくつもあった。大家でまた登場わがていがない人も多くあるが、徐々に名論に接したいと思っています。

座右の句・私の句

★はじめはここまで書くつもりではなかったのに、元来いとも来てしまっただ。この目次横は45年の1月号からである。当時、西いれを氏から目次をひろく使いたすきではないかと、ご忠告をいただいた（目次の件ははっきりと考えてあつたことだった。それではと、始めたのが「座右の句・私の句」である。

目次

★目次とつと口によぶが、なかなか目次には出してもええな目次なのである。はくが映画雑誌社にはいつ頃、なにを書いて目次に出してええなかった。さみしいものである。そん

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



明朝にしてペンネームをゴシツク（太字）にしているのもそのためである。

ペンペン草

★一度書いたことのあるけど、荒れ果てた家にはいるあのペンペン草ではない、青々や赤々で書くと、草橋をこしつけての「ペンペン草」である。広辞苑にはその音について「児童語で味線くさ」と英（さや）の形が味線の控（ばち）に似ている」とある。杉本秀太郎先生（京都女大久夢）の三味線草について書いておられるがもうスベラス（不二田）

（不二田）

南紀 和歌山 四国でのお泊りは――

南海電鉄サービスチェーン

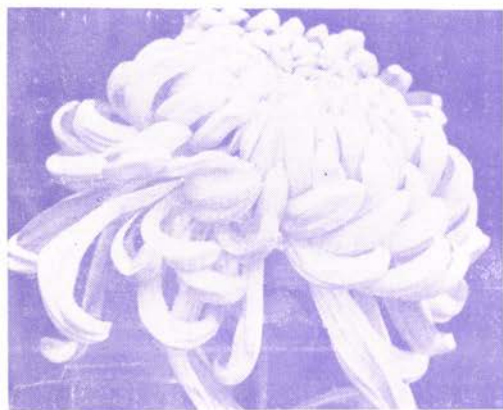
ホテル・旅館

白浜温泉 正統温泉 正統温泉ホテル	徳島・鳴門 鳴門ホテル
政府登録和洋観光旅館	政府登録和洋観光旅館 鳴門
政府登録和洋観光旅館	政府登録和洋観光旅館 鳴門公園ホテル
勝浦温泉 勝浦温泉ホテル	紀北・橋本 紀北ホテル
政府登録和洋観光旅館	紀北・橋本 紀の川苑
湯峰温泉 湯峰温泉ホテル	大阪・泉南淡輪 淡輪ホテル
政府登録和洋観光旅館	大阪・泉南淡輪 淡の輪苑
和歌山・新和歌浦 新和歌浦ホテル	大阪・なんば 一泊屋ホテル
政府登録和洋観光旅館	ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄



一番よい酒

うまい酒

菊正宗

清酒

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影